NMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNM

会　報

2007年5月25日　No. 2

ニチメン東京社友会

〒107-8655 東京都港区赤坂2－14－7 双日㈱内 17F
URL http://nmtkshayukai.hp.infoseek.co.jp/
E-mail menkwa@sojitz.com

NMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNM

【目　　次】

【ページ】

1．２００７年度総会・懇親会開催……倉又　則夫 …… 2

2．会員総数及び新規加入者 …… 3

3．大阪社友会設立に向けて準備・急ピッチ …… 4

4．経団連メンタークラブ・メンター募集の件……双日㈱　寺西　清一 …… 4

5．Welcome to My Homepage …… 5

═══　会員の動静　═══

6．OB会の紹介
①「砂場の会」（ニチメン東京合樹OB会）……牧　洋生 …… 6
② ニチメン・ヤンマー関係OB・OG会……大平　栗雄 …… 7

7．同好会の紹介
① ニチメン湘南会“GOURMET会”……長谷川　洋 …… 9

8．個人投稿
日中友好関係の重要性について……住山　忠雄 ……10
三人の高木、京に集う……高木　亨一 ……11
東欧諸国見聞記……高木　靖雄 ……14
ソ連とロシア、不変の音楽……高木　恒久 ……16
ベルリンの壁崩壊……福本　国純 ……19
東ポーランド、ユーゴそして飛んでイスタンブール……水堀　勤 ……20
社会主義国から資本主義へ……中條　幹雄 ……23
“カダフィーに狙われた男”ニチメンOB　浮貝泰匡君……吉川　秀夫 ……25
タイ（泰国）のフランス人――或る国際交流……岩下　恒則 ……26
私のミレニアムと世紀はじめ……山邑　陽一 ……28
『インドシナ今昔譚』 Part－1－「仏領インドシナに生きる」久澤　克己 ……29
宮本和夫さんを偲ぶ……福富　直明 ……31
木元巌さんを悼む……高木　恒久 ……33

9．役員・世話人 ……34

10．双日株式会社側での社友会担当部署及び担当者 ……34

11．訃　報 ……35

編集後記 ……36

2007年度総会・懇親会開催

世話人代表　倉　又　則　夫

2006年7月、旧来のニチメン『長月会』の衣替えとしてではなく、全く新しいコンセプトと希望を新しい皮袋に込めてスタートした『ニチメン東京社友会』が設立されてから早くも一年にならんとしています。
私が“会報”創刊号にて述べました“縁の下の力持ち十一人衆”の世話人は、総会後も地道な活動を継続して、新規加入会員の獲得に向け奮闘してきました。
その結果、この4月末時点で、累積会員数が600名を超えることが出来ました。

一方において、この半年間でも、何人かの会員OBが幽冥境を異にされました。
自然の摂理とは言え真に厳しい現実であります。 衷心より哀悼の意を表します。
短期間の会員であられましたが、そのお葬儀には、社友会名にて夫々に供花を献上することが出来ました。

さて、本年度総会・懇親会は、下記要領にて開催いたします。

＊　日　時　　2007年7月14日（土）
　　11時30分　受付開始
　　12時00分　総会開始
　　12時15分　懇親会開始
＊　場　所　　東京都中央区日本橋茅場町3－2－10
　　鉄鋼会館　8Ｆ　大宴会場
　　Tel. 03－3669－4856
＊　会　費　　懇親会費　　7,000円　07年度年会費　3,000円
　　合　　計　　10,000円　を当日受付にてお支払いください。

＜追伸＞

＊　新規加入要領ご案内
　本年1月26日開催の世話人会で、今年の活動方針の一つとして、会の情宣活動と会員の増強を決定、早速2月6日には、有志の手により、未加入の方々103名宛会報第一号を添えて、加入勧誘キャンペーンを行いました。
　併行して世話人個々による情宣活動の結果、現在、延べ600名余の会員を数えるに至りました。
　世話人会では、更なる会の充実の為、より多くのニチメンOB・OGの方々の御加入を歓迎いたします。
　加入方法は、年会費の納入と、メール、ハガキなどで社友会宛に住所・氏名・電話番号をお送りください。
　次いで、下記口座に　年会費@3，000円をお振込みください。
　　（2007年7月～2008年6月第二年度分相当）。
　三菱東京ＵＦＪ銀行　東京営業部　普通預金口座　No. 8225155
　ニチメン東京社友会　代表　倉又　則夫　（クラマタ　ノリオ）

＊　既加入会員の皆様へ；第二期年会費納入の御願い
　7月以降の第二期分として、上記口座にお振込みされるよう予め御願いいたします。

会員総数 及び 新規加入者

No.	摘　　要		会員数
1	平成18年12月25日現在	（第１回会報・名簿発行時）	５７４
2	平成19年５月15日現在	（第２回会報・追加名簿発行時）	６０５
3	新規会員加入者数	（平成18年12月26日～平成19年５月15日）	３１

新規加入者一覧

1	小野賢次	11	角掛康弘	21	塚田尚
2	国領和彦	12	脇邦晴	22	中條幹雄
3	斎藤健	13	田中偉尭	23	細谷聡
4	斉藤至弘	14	松岡秀樹	24	霜鳥雅徳
5	高木靖雄	15	下浦通洋	25	北井暁夫
6	津田賢一郎	16	宮島弘	26	外林俊浩
7	浜地道雄	17	鈴木邦治	27	菰田雅治
8	八木隆	18	堀田恒雄	28	木村紘一
9	牛久保豊	19	金谷晴巨	29	岩橋宣之
10	富田仁	20	坂田泰文	30	青山功
				31	山田直一

（順不同　敬称略）

大阪社友会設立に向けて準備・急ピッチ

ニチメン大阪社友会
発起人・世話人一同

経　　緯：

長月会が幕を閉じてから約５年が経過した昨年７月、東京社友会が発足し、それと共に大阪社友会の速やかな立上げを望む声が大きくなりました。

紆余曲折はありましたが、本年に入って設立準備のための具体的な動きが開始されました。

活動の現況：

旧ニチメン大阪本社中之島ビル内の双日（株）会議室（５Ｆ）か、準備作業のために貸与されている大阪社友会室（８Ｆ）に於いて、全体会議或いは小グループ会議をたびたび行なっています。男女を問わず過去の全従業員を対象に名簿の整備に努め、入会の意思を尋ねるアンケートの結果がほぼ出ました。目下、設立総会に向けて案内状の発送、総会に提出する資料の作成、入会費の受納、会場の段取りなどの作業を進めています。

アンケートの結果：（４月末日現在の概況）

本年３月のはじめ頃から、ニチメン大阪社友会の創立について、アンケートの形式で

1600名の方々に賛否をお尋ねしたところ、死去されていた方々、郵便物不達、回答されなかった方達を除いて、その３分の２に当る約700名が賛意を示され、総会には

約400名の出席が予定されています。

設立総会に向けて：

来る７月３日（火）、大阪市中央区の綿業会館に於いて午前11時30分より開会予定の設立総会に向けて、受付業務、議事次第の進行、総会後の懇親会など諸事に遺漏が生じないよう準備を進めます。皆様のご支援をお願い致します。

以　上

経団連メンタークラブ・メンター募集の件

双日株式会社　経営企画部
部長　寺　西　清　一

拝啓　時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

双日(株)は日本経済団体連合会(経団連)のメンバーとして、同団体の活動を支援しております。この度、経団連から幅広い知識と豊富な経験を持つ当社OBに対して、中小・ベンチャー企業に助言を行う「メンター」の募集の要請を受けましたので、ニチメン東京社友会様会報の場をお借りして、以下ご案内申し上げます。

■メンター制度概略

同制度は、潜在的な成長力の高い中小・ベンチャー企業(メンティー)に対して、会社経営・新規事業プロジェクトの指揮・指導等の経験豊富な企業OB(メンター)が、ボランティア精神により様々な助言・指導

を行う制度です。

経団連ではメンターを募集し彼らを「経団連メンタークラブ(仮称)」として組織化し、助言が必要なメンティーとマッチングさせます。メンターは、ボランティア精神の下、無報酬にて電話・メール・面談等により定期的に(少なくとも月1回)メンタリング(助言)をして頂きます。

別紙にて経団連作成のプロジェクト概要を同封させて頂きますので、是非ご高覧頂き度く存じます。

■今後のスケジュール等

本プロジェクトは、07年度から活動を開始する予定ですが、未だ試験段階です。現時点では首都圏在住の方に限ってメンバー募集を行っている段階であり、今後の活動等はメンバー登録完了後、経団連から直接御連絡させて頂きます。

■問い合わせ先

本プロジェクトにご興味がある方、主旨に御賛同頂ける方は、下記まで御連絡頂ければ幸いです。

双日総合研究所　政治・経済・産業調査グループ　瀬下　小林
電話番号　　：03-5520-3901(瀬下)　03-5520-2572(小林)
E-Mailアドレス：seshimo.takeshi@sojitz.com　kobayashi.msayuki- 1 @sojitz.com

敬　具

☆この頁は、ご自分でHPを開設されて居られる会員の皆さんのURLを、Internet Webを楽しまれて居られる会員の皆さんにご紹介する為に設けたものです。
どの様なHPを開設され居られるのか、ご一覧下さい。

☆また、ご自分のURLを本頁に掲載希望される方は、本会　及び　HP担当世話人（栗田）宛e-mail　でご連絡下さい。 受信次第掲載いたします。 (HK)

No.	氏名（敬称略・申込順）	U　R　L
06	.	.
05	.	.
04	.	.
03	高　木　恒　久	http://takagion.ciao.jp/
02	岩　下　恒　則	http://tomtom.cocolog-nifty.com/thomas
01	田　村　陽　一	http://mynene.web.infoseek.co.jp

「砂場の会」（ニチメン東京合樹OB会）

牧　　洋　生

神田駅を出て日銀・三越方面に向かい、室町四丁目角からフト目を右に転じると関東大震災でビクともしなかった竹中工務店の名建築、こげ茶色の「近三ビル」が目に入ります。
そこにニチメンの東京支社がありました。（当時は、日綿実業といいました。）

其の隣の角に、明治2年創業で、仕舞屋風の木造の蕎麦屋「砂場」があり、隣と言うこともあり、時々暖簾を潜っては蕎麦を食べに行ったものです。
ところが、箸、ホンの数掬いで一枚が終わる位の盛り付けなので、当時若かった私どもには物足りない。何枚も食べたいが財布とも相談の上、適当に打切らざるを得ないのは残念でした。
当時の財界の大御所である日鉄の稲山社長や富士鉄の永野社長なども時々見えて、蕎麦を食べておられたのを懐かしく思い出します。
でも、蕎麦に限らず玉子焼きや焼き鳥、あさり、いたわさ、で一杯やるのも美味かったですね！

私ども、ニチメン東京合成樹脂部も「近三ビル」にいて、「砂場」には、始終お世話になっていました。OBとなってからも、懇親会は砂場を中心に良く集まっていたものです。
いつの頃からか、「砂場の会」と呼称して、神田駅の近くに移転した現在の「砂場」に集まり、上記定番メニューで懇親会を開催しています。

今回、平成19年3月14日（水）に「砂場」で「砂場の会」が催されました。
幅広に呼び掛けようと言うことで、今回は、特にニチメン東京合樹部に一時でもいた方々は元より当時、合樹部にご協力いただき接触あった関連会社の方々へも呼び掛け、合計90名を上回る諸兄姉に案内状を差し上げました。

この為、久々の邂逅があり、より賑わいだ雰囲気になったのは成功でした。
今までに出席もあった5～6名の海外在住の諸兄は今回残念乍らご都合付きませんでしたが、はるばる鹿児島から駆けつけられた津之地昭夫さんも含め合計40名弱の方々にお集まり頂くことができました。
参加者の中には、「おう！砂場の会とは懐かしいなぁ！」と言われる方もあり、一緒に苦楽を共にした往時を「砂場」と共に思い出していただき、嬉しいことでした。

成見和男さんの「乾杯！」の音頭で始まり、今でも八十歳以上で元気にゴルフされている大野久生さんや飯田耕作さんも出席されました。

また、ニチメンを退職した後、現在も前田道路社長として第一線で活躍されている岡部正嗣さんや以前大末建設社長をされていた熊谷信弘さんも出席頂き、元気な姿を見せて頂きました。出張の為欠席予定だった餘野木茂さんも都合付き直前に駆けつけて頂いたのは嬉しいことでした。

旨いお酒と砂場定番の玉子焼きや焼き鳥、あさり、山葵の利いた蒲鉾、それに最後にざる、もり蕎麦などで締めて、昔食べた同じ味の料理に舌鼓打ちました。

その間、懐旧談や新しい話に花が咲き華やいだ楽しいひと時でした。

締めは、小野寛さんにお願いしました。

行く行くは、元ニチメン社長の竹田博さんや現双日常務の石原啓資さんにも、「ニチメン東京合樹部OB」としてご出席頂こうと思っています。

「砂場の会」は、毎年3月第2水曜日に神田「砂場」で開催されており、来年は、3月12日（水）に開かれる予定です。

更に多くの参加者が来られることを期待しており、特に女性の方々のご出席をお待ちしております。

以　上

（尚、「砂場の会」は、会長、副会長などなく、牧　洋生、日原　東洋、本間　登志雄、吉田　紀一郎の四世話人が幹事としてやっています。）

ニチメン・ヤンマー関係OB・OG会

大　平　栗　雄

ー2007・4・7　八重洲富士屋ホテルー

平成19年4月7日　東京八重洲富士屋ホテルにて「ニチメン・ヤンマー関係OB・OG会」を行いましたのでご報告します。

本会はニチメン機械部門にてヤンマーデイーゼル商いを担当した者が集う会で今回が初めてです。

当日　受付は元女子社員の綺麗どころがズラリと並び、華やかな雰囲気の中多くの人達が20－30年振りの再会ゆえあちこちで歓声とハグする風景が見られ元女子社員の中には涙ぐむものが出てくるといった状況の中で開催されました。

最初に幹事より今回78名に連絡をとり、最終的に大阪・神戸・奈良・新潟等遠方よりの出席者5名、女性10名を含め45名の出席が報告されました。

引き続き、冒頭に挨拶された野村元副社長が、戦後日本の貿易再開直後のニチメンとヤンマーの最初の契約の実態を詳細に報告され、それは綿花輸入の専門商社から繊維商社に発展したニチメンが機械部門を含む総合商社へ踏み出した第一歩であり、その時点でニチメンとヤンマーの以降半世紀以上に及ぶ好関係の礎が築かれ、ニチメンに於けるヤンマー商い担当者のDNAが発生した瞬間でもあることを参加者一同あらためて認識し、諸先輩の功績に胸打たれるものあり、この時ばかりは会場はシーンと水を打ったように静かに野村

さんの名演説を聞き入っていました。

そして、そのDNAが社内でも確固たる地位を確立したのが、昭和43年ヤンマー貿易部が大阪から東京に移ったのに呼応して、ニチメン大阪産業機械課の辻井課長以下ヤンマー担当10名近くと、それに係わる計算課、受け渡し課、乙仲をも含め、総勢20名近い陣容が一挙に東京へ移動したことであります。

その後ヤンマー商いは日本の高度経済成長に合わせ驚異的な発展をとげ、東南アジア各国のみならず、ニューヨーク、ロンドン、パリさらには中近東にも担当部員を駐在させ、さらにはヤンマーと協力して海外に6箇所に生産拠点を築くまで成長していきました。

しかし　栄枯盛衰は世の習い、度重なる円高と後進国の追い上げ等でヤンマー商いも厳しい環境下にさらされ、ヤンマーのメーカーとしての商社起用の見直し等もあり、現在はタイを初めとして東南アジアでのわずかな商権のみとなっていると聞き及んでいます。

ニチメンでの各部門毎さらには海外店毎の集まりは色々とあるでしょうが、取り扱いメーカーの担当者限定の集まりは少ないのではないかと思いメーカーとのつながりの一部をご紹介させていただきました。

会は、その後石澤さんの乾杯の音頭で歓談に移り、それぞれが往時を偲び、なつかしい苦労話に花を咲かせ、最後は長谷川さんの中締め、そして全員の合同写真で終わりました。

参加者　（敬称略・女性旧姓）

秋元義弘、新崎盛辰、石沢謙一、泉伸夫、和泉雅一、植田昭洋、漆崎隆司、大平栗雄、岡田茂、籠波俊之、上地弘子、黒坂あや、久米英人、佐藤理恵、風見芳文、下平圭子、北井暁夫、宍戸裕子、木村紘一、藤田光子、小寺大輔、越野量路、小橋雅寛、小堀裕子、笹川あけみ、澤田太郎、霜鳥雅徳、豊吉みわこ、土橋久男、中村静人、南部捷郎、野村喜久雄、野田良子、服部伸志、長谷川洋、林義人、樋口龍彦、広内卓生、廣岡幹雄、広本昌也、藤井憲宏、細谷聡、丸野純、村上欣也、吉田修一

以　上

ニチメン湘南会　”GOURMET会”

世話役　長谷川　　洋

この5月14日の横浜中華街の会合で、創設以来、22回目を数えます。
そもそも初めは、湘南会ゴルフ・コンペのメンバーによる食事会でスタートしたもの。
GOURMET会とは、会食もさることながら、”久留命会”と勝手に命名してグルメ会と読ませ、久しく命永らえる会としたもの。
グルメ会会長、故安藤幸男さんが80歳を超えても、なお御元気であられた事に我々も見習って、美味いものを食べて、大いに談笑し、かつニチメンのベル・エポックを語ろうという会であります。
先年、大阪に移住された野村喜久雄さんも態々馳せ参じてくださいます。
当初、機械部門OBが多かったが、安藤さんの御提言で、他部門の方々、財務、食料、合成樹脂、業務OBも参加されて多士済々であります。
昨年12月26日の会合では、久澤克己さんより日本ベトナム経済協力の現状を語って頂いた。
本田務さんは、韓国の　HYUNDAIグループの総帥についての評伝の翻訳について、その経緯を語ってもらった。
毎回、ニチメン時代の懐旧談に華が咲くが、この昔のことを語ることは頭脳活動を活性化して、認知症への道を遠くすると、健康雑誌に載っていた。
この先、何年続くか分かりませんが、安藤さんに習い、先ず80歳を超えるまで多くの方が元気に参加できることを願っています。

＊12月26日御出席の皆様；敬称略、順不同
岩田昭二、杉本佳久、牧　洋生、　笠井公雄、都築基夫、久澤克己、立古健策、藤野泰三、北村俊夫、新崎盛辰、本田　務、　橋爪　覚、丸山泰三、菅沼利太郎、山邑陽一、長谷川　洋。

本年5月14日の会合(中華街・景徳鎮)には、大阪より野村さんも御参加され、いつものメンバー16名が集まり、老いてなお意気軒昂に語り、飲み、食べました。そのときの写真を茲に添付いたします。
○前列（着席者）左より：長谷川洋、水庫博夫、立古健策、野村喜久雄、岩田昭二、笠井公雄、本多　務
○後列（立てるは）左より：鎌田亮三、杉本佳久、藤野泰三、北村俊夫、久沢克己、高瀬善男、大北克利、都築基夫、丸山泰三の皆さん

日中友好関係の重要性について

住　山　忠　雄

私は大正 8 年中国上海で生れ育ち中国語を学び、中国で 4 年間兵役（中国語を活用しました）に服し、終戦後は上海の日僑管理処に留用され、昭和23年 5 月帰国しました。

帰国後色々な仕事につきましたが、中国語を生かす仕事につきたいと思っていたところ、元ニチメン社長南郷三郎氏が通産省の特殊法人である日中輸出入組合の理事長に就任されることを知り、早速採用を志願し、外務省中国課において試験を受け合格し南郷理事長秘書兼総務課長に就任しました。

第四次日中貿易協定交渉では首席通訳として参加し1958年 3 月協定を締結させましたが、同年 5 月長崎国旗事件が発生し、日中貿易は約 3 年間中断され、南郷理事長もやめられることになり、南郷様の特別のご配慮により、小生は40才でニチメンに就職することができました。

初め鉄鋼部に配属され、これも南郷様のお口添えで香港支店に派遣される直前に日中貿易が再開され、中国部が出来て配属され、爾来、訪中回数91回、中国滞在日数　累計3,239日、定年後も嘱託として73才まで勤務することができました。6 代のニチメン社長（南郷三郎、福井慶三、神林正教、上田俊二、日比野哲三、田中義巳）の訪中には必ず随行し、特に上田社長には12回も随行致しました。

次に一生を日中関係に捧げてきた者として、日中両国の友好関係が如何に大事であるかを次の如く申し上げたいと思います。

1．昔の中国は確かに遅れた国であり、それに乗じて、日本の軍部が中国を侵略したことは厳然たる事実であります。

2．しかし日本の敗戦により眠れる獅子は起き上り、今や14億の人口を持つ、経済、軍事大国になりつつあります。2008年北京オリンピック、2010年の上海万博は中国の面子にかけても成功させ、更に発展し続けるでしょう。

3．中国は八路軍、新四軍を基礎にして出来た国であるから軍部の意見が強く、中国の軍部は朝鮮戦争以来アメリカを仮想敵国とし軍事力の強化を計っており、いずれアメリカ、ロシアと肩を並べる軍事大国となるであろう。

4．日本はアメリカと安保条約を結び、そのお蔭で平和が守られ今日まで発展してくることが出来たのであり、アメリカには感謝しなければならないのは当然である。しかし現在アメリカはイラク問題で精一杯でアジアのことまで手が回らないように見受けられる。

5．地理的に見て日本のすぐ隣りに14億の人口を持つ中華人民共和国が厳然として存在している以上、日本の政府、国民は中国を軽視することなく政府間、人民間の交流を深め、日中友好関係を強化してゆくことが非常に重要であると思われる。

6．来年（2008年）は北京オリンピックが開催されるので日本もこの大会が成功するように協力することも大事であろう。

以　上

三人の高木、京に集う

社友会世話人　高　木　亨　一
（元ワルシャワ駐在員）

昨年の暮れ、たしか21日だったとおもう、霙模様の寒い日でした。
私は、社友会の会報チームの一員として、編集長の長谷川さんと、会報の創刊号及び、会員名簿の最終校正の打ち合わせを関内印刷と済ませ、馬車道十番館で、アフタヌーンティと洒落込んでいた。

明治時代の西洋館を再現、古き良き時代を偲ばせる雰囲気を持つ、十番館で、会報及び名簿の出来が予想以上に上出来で、年内発送の確認も取れ、ご機嫌な二人は、おおいに話が弾んだ、

私が70年代に、当時鉄のカーテンの向こうとか、米ソ冷戦状態とか、更に、日本人が嫌い、恐怖に感じている、共産圏、社会主義国家と呼ばれていた、東欧の国、ポーランドのワルシャワに駐在したときの話しに及び、アジアが主であった、編集長には興味のある話題であったのか、熱心に聴きかれていた。

73／4年だと思う、モスクワ店に、高木恒久さんが、チェコのプラハ店に、高木靖雄さん（通称ヒゲの高木さん）が、この丁度、中間に位置するワルシャワに私、高木亨一が居た。

新市場として注目を集め始めた東欧圏、“ソ連東欧に強いニチメン”と言われてる事も相俟って、内地からの出張者は勿論の事、各メーカーが挙って、出張者を送り込んで来た、てんてこ舞いの忙しさであった。

ある日3／4組のメーカーの出張者が一堂に会す事になり、中には競合する同業者同士も居たが、呉越同舟　自宅にお呼びした事があった、街中のレストランは社会主義国の特徴で、国営が故に、味、サービス何れも最悪で、自宅での妻の手料理が最高のもてなしであり、大いに喜ばれたものであった。この点、妻には感謝している。

誰とはなしに、『ニチメンさんは何処へ行っても、高木さんが出迎えアテンドしてくれる、明日、プラハに行きますが、高木さんがアテンドされると聞いてます。』

すると別の方が、『私たちは来週モスクワに入りますが、空港に高木さんと言われる方が出迎えると、ご本社の方から連絡受けてます』

初対面同士の集まりが『3人の高木』の話題で一気に盛り上がり，とんだ所で印象付ける結果になり、その後の商談がスムーズに進んだ事は云うまでもない。

それから、30数年経った昨年末、河西良治さん時代の欧阿中東の忘年会で、恒久さんに会う機会に恵まれ、話題が、三人の高木、（ニチメンの三高）の事に；、

『ひげさん、京都に居られ、ドイツ人の奥さんと別れて以来、独身だったが、日本人の奥さんと再婚、京都で悠々自適とか、この前会いましたよ、春になったら、一緒に行きませんか、ヒゲさんきっと喜びます、今晩でも都合聞いて知らせます。』

数日後、『ヒゲさん喜んでいた、3月末が良い、都合如何？』 と恒久さんよりメールがあり、結局、3月29日に京都四条大橋にある、東華菜館で会う事になった。

『‘三高、京に集う’ですね、是非行きましょう』

よくよく考えてみるに、過去に、この三人の高木が一堂に会した事は無く、30数年ぶりの再会とは言えず、矢張り、‘三高、京に集う’ということになった

ヒゲさんとは、その後も、東独向けに特殊合金プラントの商談に際し、業務本部の特別な計らいで、抜群の語学力もさることながら、東独独特のやり方に精通されておられる、ひげさんを派遣して頂くことになり、未熟者の小生に取りこれ以上の助っ人は無く勇気百倍、東ベルリンに乗り込んだ。

プラント・メーカー　神戸製鋼も営業及び技術より総勢7名のネゴチームが合流、ネゴは5ヶ月間の長期戦になった、神戸も本件最重要案件に位置づけ必注体制で専務クラスを投入、最後まで喰らい付いたが、ドイツマルクの大幅下落と直面、残念ながら、西独の競合相手に値段で敗北した。

神戸製鋼はこの時のニチメンの対応を高く評価、後に、マレーシア向け肥料プラントの引き合いを並み居る競合他商社を退けニチメンを起用、受注に至った。
ヒゲさんの功績、誠に大きかったといまさらながら、感謝しております。

一方、モスクワの高木恒久さんとは、お話しする機会がなかった。
初めてお会いし、話しする機会が出来たのは、私が中東地域支配人であった94年頃ロンドンでの欧阿中東店長会議の席でした。
CIS地域支配人兼モスクワ所長の高木恒久さんは、オブザーバーで出席された。

イスタンブール店の開設に伴い。CIS諸国、特に、歴史的に又地理的にトルコに近い、トルクメニスタン、アゼルバイジャン、カザフスタンなど、市場開拓にモスクワ店との共同歩調体制の申し入れがあったと記憶している。

過去馴染みのなかった東欧地域に、興味深く、聞かれていた編集長、次回の会報のコンテンツに格好の題材と、OB交遊録として、寄稿して欲しい。と言う事になった。

あちらこちらでくすぶっていた自由主義への動きも、ベルリンの壁の崩壊と言う歴史的出来事に、勢いが付き、ソ連はもとより東欧各国が資本主義国に変貌して行った。
その歴史的瞬間に立ち会ったOBに体験談を寄稿願ったらどうかということになり、会報の構成に悩んでいたのが一気に6名の寄稿者が出来た事になった。

帰宅後、当時の東ベルリン所長の福本匡純さん、ワルシャワの中條幹雄さん、更に、ワルシャワ、ベオグラードと赴任する先々で戒厳令に遭遇した、水堀勤さんに寄稿を依頼した。
三高木の恒久さんにもソ連、ひげの高木さんには東欧全般をお願いした。

三高木の集う日の前日、新横浜から、新幹線で名古屋に向かった。田中久彦先輩が急遽、三高に参加される事となり同行。名古屋では三品さん、松井さんの歓迎を受け、旅費の足しにと雀荘に直行、結果返り討ちに会う。

翌日，京都駅で恒久さんと合流、東華菜館にタクシーで向かう。
東華菜館は四条大橋を渡った所に5階建ての名建築家の手による、スパニッシュ・バロック建築で（大正15年築）和の京都に中でも代表的なランドマーク、の一つになっている有名な洋館だそうです。その菜館の前の歩道にひげさんの姿が見えた、傍には奥方と思しきご婦人が彼の手を支えるように立つっていた。

劇的な再開のシーンを想像していたが、いざ、実際に面と向かうと、『いらっしゃい』『久し振りです、遂に来ました』、それだけだった。

アレ！　ヒゲさんにひげがない。ひげのないひげさん、案内に従いエレベーターに、日本で最も古いエレベーターと呼ばれている、半自動の蛇腹の扉が開き、乗る。

30年前のヨーロッパでは珍しくない、ジャバラの扉のエレベーターに乗った瞬間30年前にタイムスリップした、そう云えば、当時のワルシャワの事務所もジャバラのエレベーターであった、よく、途中で止まり閉口したものだった。

四階に着き、大広間に案内された、客もまばらでガランとした静かなふんいきは正に社会主義時代の東欧のレストランそのものであった。

奥方へのご挨拶もそこそこに、当時工作機械を売りに良く来られていた田中久と三人の髙木は相手の話が終わるのも待てずに話し始め、あっという間に30年の空白は埋まってしまった。

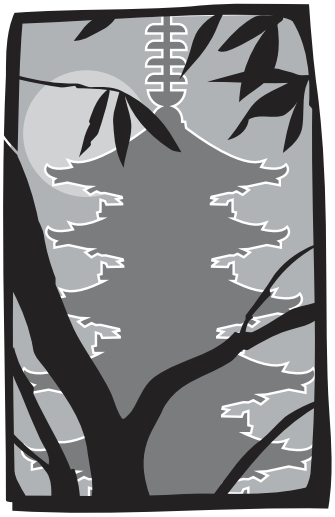
ひげのないひげさんは前から良くなかった目の具合が進行しておられる様で、奥方が食事の手助けをされておられ、仲睦まじい老夫婦（？）をほほえましい光景だった。奥方は15歳も年下との事、老夫婦と呼ぶのは失礼か。

ドイツ人の先妻と別れてから独身であった、ヒゲさんに東ドイツ駐在時代に親しくしてた在東独日本大使のご夫人の紹介で知り合い結婚されたそうで、ひげさんにとって、これ以上の伴侶は居ないと思うほど息が合った姿に触れ安心した次第。

12時頃から始まった、昼食会も3時を過ぎ、各自次の予定があるため、再会を約し、夫々、次の目的地に向かった。

3時間以上にわたる三高＋久のトーク・バトルは、社会主義国家に於ける、駐在員の苦労話、特に外国人は全てスパイ容疑で尾行が付きホテルの部屋には盗聴器が、国際電話は当然もモニターされて居た事、本社とのやり取りは暗号を使っ事。自宅での接待に備え、日本食用食材を西ベルリン、デュセルドルフまで仕入に行く事、等々、日本では考えられない常識、非常識があった。

横浜の洋館で始まった、この物語も、京都の洋館で完成と粋な流れで、何とか，書き終えてホットする間も無く、近日中に会報第二号の印刷打ち合わせに関内印刷に行く事になるが、アフタヌーンテーに誘われたら、断るべきか？



東欧諸国見聞記

元ベオグラード、プラハ、ベルリン所長
高　木　靖　雄

東ベルリンの壁が崩壊してから、早18年になる。
壁が出来たのは、1961年8月13日であったが、その理由は、当時　東ベルリンから西ベルリンへ通勤する市民が、何万人にものぼり、東独政府が、労働力の流出、ひいては、社会主義体制の崩壊を危惧したからである。

1958年春から1961年春まで、ドイツ連邦共和国（西ドイツ）ハンブルグのMENKWA　G.M.B.H　(ドイツニチメンの前身)に勤務していたが、壁が出来る前に帰国した為、残念ながら壁を見に行く事は出来なかた。
しかし、ハンブルグ駐在中に何度かベルリンに行く機会があった。
当時は車で、ブランデンブルグ門をパスポートを見せるだけで自由に通過し、東西ベルリンを往来できた。

東のアレキサンダー広場、西の記念教会の辺りは瓦礫の山で、戦争の・傷跡が生々しく残っていた時代だった。
ベルリンからの帰途、オリンピック競技場にも立ち寄りゲートにある、1936年の優勝者のプレートを見たがマラソンは日本の孫選手の名前を見つけた。。（現在は韓国と書き換えられている）

さて、東京に転勤後は東欧諸国の在京代表部との折衝が主たる業務で、コレが、以後、定年まで続いた、小生の東欧行脚の始まりであった。

先ず、チトー大統領が健在だった頃のユーゴスラヴィアの首都ベオグラード、引き続きベルリン、次にチェコスロヴァキアの首都プラハ、最終は東独、其れに東独に駐在する前に東ベルリンへの長期出張といった具合だった。
最初の、ベオグラード/ベルリンの約四年間は必要に応じブカレスト、ソフィア、ワルシャワ、プラハなどにも屡々でかけた。
考えてみれば、極めて非効率的な話だ。
1967／8頃ポーランド出張中の週末、アウシュヴィッツ（現オシュヴィエンチェム）にユダヤ人強制収容所跡を見に行った事があった。

バラックが整理され広大な敷地だけになっていた所もあったが、鉄道の着くゲートの『労働は自由をもたらす』の鉄文字、ガス室、その向かい側の木造収容建物、解放された時、所長のドイツ兵を処刑したといわれ言われる井戸などが保存されていて、中でも一見シャワー室の作りのガス室内は、表現の出来ない恐怖を感じさせるものであった

壁が出来てから、初めて東ベルリンに入った時は、何と手続きが面倒になったものだと思った。

後日、西ベルリンから鉄道駅、フリードリッヒ・ストラッセ又は、チェックポイントチャーリーを通って東ベルリンに戻る時、毎回時間の無駄を感じたものだ。

東京に来ていた代表部員をはじめ、政府、公団の要職にあった連中は例外なく共産党員で、我々の商談相手も他の社会主義国同様殆どが党員であった。
ドイツ統一後、かれらは、どうして居るのか知りたいものである。

尤も、常時壁の中で生活せねばならなかった我々は、一般市民との接触も多々あった。
例えば、1961年壁が出来る前夜、西ベルリンから恋人に会いに東ベルリンに行ったまま帰れなくなり、そのまま結婚して公団の通訳をしているとか、
事務所に掃除に来ていたオバサンとか、ライプチッヒ見本市等に使っていたタクシー運転手とかである。

一般市民の話は、例外無く体制に対する不平不満が或いは怒りが殆どで、次いで諦めと、愚痴が続いたものだが、こう云う個々の力が終結した事により壁崩壊につながったのだろう。

1989年壁崩壊の日、小生はデュッセルドルフに居たが、テレビにはブランデンブルグ門から西へなだれ出て来る群集の姿が映し出され、後方のウンター・デン　リンデン通りには民衆で埋め尽くされていた。
その前日だったか、ハンガリーがオーストリーとの国境に集まる東独人の国境通過を自由にしたのだ。
その直後
　　『東独の事件をどう思うか』
とテレビインタビュを受けた、ゴルヴァチョフソ連大統領は、
　　『各々の国が考えればよい事だ』
とのみ答えたのが印象的だった。

2003年機会がありドイツに行った際､南ドイツのウルムから旧東独地域に入り北上ベルリンへ行ったが､当時既に統一より14～5年経っていたにも拘らず、
「アウトバーン」は統一前と変わっておらず、インフラの改良までなかなか手が回らないんだろうとの印象を受けた。
ブランデンブルグ門のそばには高級ホテル『アドロン』が建てられ近辺は大変賑っていた。しかし、アレキサンダー広場の方に行くとなんとなく、暗い，感じがして旧東独時代を思い出させる雰囲気が残っていたようにおもえる。誰もが現役時代に見てきた又は経験してきた

ユーゴスラヴィヤは分裂、チェコスロバキアも2っに別れ、ドイツ民主主義共和国は消滅し去り、いまやEU経済圏が広がっていく時代になったが、経済格差の問題を抱えて将来どうなっていくのか見つめて行きたいもののである。

昔、東西貿易部で一緒だった髙木恒久君。旧東独で神戸製鋼所の合金プラントの商談に参加した、髙木亨一君，それに名古屋支社の時から色々協力して呉れ、プラハには何度も出張してくれた、田中久彦君が揃って京都に来てくれ，一刻旧交を温める機会を作って呉れた事、心より感謝するしだい。

お互いに健康な長生きを約す、

ソ連とロシア、不変の音楽

元モスクワ店所長　高　木　恒　久

1962年9月3日。直行便がなかった時代。アムステルダム経由KLMのプロペラ・ジェットで4時間。初めてのモスクワだ。

空港の滑走路には初代駐在員の木元、守両先輩が迎えに来てくれていた。

事務所に顔を出す、といってもユージナヤという旅館の一室。

出張でモスクワにきておられた、直属の課長、長広昌夫さん（1964年癌で亡くなる）が翌日私を街に案内してくれた。これがボリショイ劇場だ、あれがレーニン博物館だと教えられ、ロシア通の大先輩の案内に気を許し、私は初めて見るモスクワの街に好奇の目を走らせていた。

突如「じゃあ、3時にホテルの僕の部屋で会議をやるから来てくれ」

と言残すや長広さんは雑踏の中に姿を消してしまわれた。

しまった！ホテルの名前も場所も聞きそびれた。3時に何食わぬ顔で長広さんの部屋を訪ねることは出来たが、実は大変慌てふためいた初日だった。もう少しで「ぶったるんでる」ところを露呈するところだった。ロシアでは当時「ヴィヴァ　クーバ」と幼稚園児までが旗を振ってキューバ万歳を叫んでいたころだ。

一方、中国とは関係が冷え切っていた頃で、日本人は中国人に間違えられないように服装を凝らしたりしていた。やがて、長広さん、木元さん、そして守さんが日本へ帰国してしまい急に寂しくなる。仕事はというとお役人相手の商談で、藁半紙にタイプした引き合い書をもらう事から始まる。日阪製作所の横山さんと本社の志方さんが来られて染色機械商談。忍耐、又忍耐。成約までは、座り続ける。晩はボリショイ劇場で、オペラかバレエを観て過ごすしかない。食事はというと硬いが肉類は充分あった。野菜は不足していた。

しかし、よくもこう不便な街なのだろう。マッチ一つ買うにもですよ、バスに乗ってゆかねばならない。ロシアと付き合うには忍耐しかないのか。街行く人は皆肥っている。食料不足になっても耐えられるように備えているんだろう。若い女性は総じてお洒落で可憐だが、ファッションに飢えていた。「街中で目を閉じ、パット開いてご覧。同じ柄の服を着ている女性が4－5人は必ず目に入るよ」と長広さんが云われた通りだった。

フルシチョフ第一書記は、アメリカに追いつき、追い越せと号令を掛けている。一般市民は、追い越せるわけがないと覚めていた。

秘書もいない駐在員生活は毎日が休みなく忙しい。内地への連絡は電報のみだ。ベターっと切れ目無くローマ字でタイプした文章を、15字づつ切って頼信紙に貼りLT電で送る。中央電報局にタクシーで駆けつけ、発電を済ませると夜の12時。何処も閉店で飯を食う場所が無い。

ある晩、自室で、スルメを齧り、ウオトカを呑んで寝た。あくる朝、胃痙攣を起こし、医者を呼んでもらった。「昨晩何を食したか？」「カラカーチッツァ（烏賊）の干物、それにウオトカです」医者は「カラカーチッツァだ？そんなもの食べてはいけない!!」と云って薬を呉れた。ウオトカをけして罪人にしないところがロシアの医者だ。

あとで、念のため字引を見たら、カラカーチッツァとは①烏賊②気味の悪い物、とあった。烏賊を見たことが無いロシア人が想像するのは後者の方だったようだ。そういえば、日本でもイカモノというのがあるが。

数ヶ月すると予定されていた小杉賢次さんが所長で赴任してこられた。小麦を大量に買い始めたソ連は外貨が足りない。見返りに機械を買わないと、輸出商談が進まない。そんな状況を背景に産業機械課長の小杉さんが来られた。どうせ買うなら使える機械をと調べておられたある日、溶接機械で有名なパトン研究所に

行くことにしたから一緒に来てくれと小杉さん。
　真冬、零下32度の凍てついた夜、キエフ行きの汽車の発着駅に向かった。こうも寒い日の夜汽車は大変だが今更どうにもならない。公団の若手の担当者ニキーチナ嬢が旅支度で待っていた。それが信じられないほど美しい姿で。
　青い瞳、真っ白い肌に口紅が美しい。銀狐のそろいの帽子とオーバーコート、黒のブーツ。フランスのファッション雑誌からそのまま抜け出したよう。いや、アンナ・カレーニナか。勝手な想像が頭の中を駆け巡る。当時モスクワでは買えなかったネスカフェのインスタント・コーヒーをバッグから出して淹れてくれた。この人の父親はきっと偉い人なんだろうと想像した。ところでアンナ・カレーニナとの夜汽車の旅は生産的結果をもたらした。

　小杉さんの思いは通じニチメンは溶接機械の輸入代理権を手に入れることが出来たのだった。
　日本人はロシア人の３倍働いたのかもしれない。日本人は日本のほうが豊かだと妙に自信を持っていた。まだまだ生活の為のインフラが貧しかったオリンピック前の日本。それに対し住居、道路、暖房が充実していたソ連。 モスクワでは、５階建てのフラットに勤労者が安い家賃で住み、真冬でも室内温度は20度以上の温かさが保証されていた。だから、ロシア人は生活に危機感を持たず。貯金も僅かしか持っていなかった。

　プレハブ建設が進んでいたソ連からコンクリート・パネル製造設備を買付けようと、日本から調査ミッションが訪ソした。日本では壁の厚さが15センチでなければ採算が取れない、と云うとロシア人は仰天する。人間の生活にはその倍は必要だというのだ。

　日本から、東洋の魔女として名高い女子バレーボール・チームがモスクワでの国際試合に参加する為やってきた。当時、日本は世界最強のチームだった。試合開始の前夜、パーティーが催され、各国の選手達が着飾って華やいだ雰囲気の処に、遅れてた日本選手が練習着のまま到着し「勿論、私たちは今まで練習をしてました」と誇らしげに云ったという。パーティーは道楽、練習は美徳。日本は未だそんな時代であった。

　70年頃だった。幸運にも大バイオリニスト、故ダヴィード・オイストラッフに紹介して呉れた人がいた。正月の３日、日本大使館での新年パーティーと重なる時間だったが雑煮を諦めて、オイストラッフ先生の音楽院での授業に顔をだした。生徒が代わる代わる弾いて先生の指導を受けるのだが、既に有名で日本にも来ていたリアナ・イサカーゼも生徒の中にいた。
　それから暫らくたったある日、ゲルツェン通りに私はモスクビッチを停めて買い物をし、車に戻ってエンジンを掛けていると、直ぐ後ろのベージュ色のヴォルガの運転手が、ヘッドライトをフラッシュさせ、私に何か合図をしている。私は、車を少し移動させて、後ろの車が出やすいようにしてあげたのだが、向こうは動く気配もなく、白い排気ガスをもくもくと吐き出し続けている。「何かお困りですか、運転手さん？」わたしはそう云って近寄ると、運転手は防寒帽を脱ぎながら、「いや、エンジンを温めてるんですよ」という。帽子を取った顔を見ると、オイストラッフ先生であった。すっかり、驚いてしまった私を見てオイストラッフ教授は、元気にしてますか？　遊びにいらっしゃい（音楽院へ）、と言ってのろのろと車を発車させた。 それから、オイストラッフ先生にはしばしば会うことがあった。然し、あるときオーケストラの指揮（そう、よく指揮もしたのだった）を終えて、楽屋に戻ったところを尋ねたのだが、先生は椅子に座り何かつらそうにしていた。その翌月、先生はオランダ滞在中に心筋梗塞で亡くなられた。

　1970年台は私にとって実り多き時期だった。狙った商売はかなりの確度で撃ち落せる自信が出来ていたし、他社の手がける商売であっても横取りする技量も出来ていた。万事に順調で、炭素の商売を創り、石油の商売に繋げる段取りを組んでいた時も時、私ともう一人嘱託だった人が、KGBに捕まった。容疑は贈賄。取調べの結果、容疑は晴れたが
　会社が我々を自主帰国させる形で丸く収めた。石油の商売は、木元さんが超人的な働きをしてくれた事で、そのご大きく伸びたのだった。

ライプツィッヒに出張した折、久々に、高木靖雄さんと、深夜まで話し合ったが、靖雄さん、木元さん、私は20台の頃　長広学校で机を並べていた仲間であった。

1991年ソ連邦が崩壊すると、ソ連国内の倉庫にある食料、ありとあらゆる在庫が一部のマフィアによって私物化され、町は無政府状態になった。乳製品を売る店にはミルクがなく、パン屋にパンはなかった。町行く人の半数はかっぱらいだといわれた。舗装道路には穴が開いたままで、そこを西側からの援助物資を積んだ大型トラックが真夜中に何台も連なり、青い灯火をかざし地響きを立てて通過する。西側の援助隊そのものが走っているのか、それとも、援助物資を横取りしたマフィアが自分の目的地へ走らせているのか、不気味な深夜の行進を良く見た。 商売でも買い引き合いや、売りオッファーが乱れ飛ぶが、どれ一つ資金の裏づけがあるのか、生産者に結びついた話なのかは、はっきりしたものがない。

かつて、日本の通商代表を務めた大物Sさん、また、マシノインポルトの総裁だったVさんなどが電話で私に一緒に商売をやろうとか、顧問契約を結ばないかとかアプローチして来た。鉱産品輸出公団の副総裁Kさんが雇ってくれないかと顔を出したのもこの頃だった。
彼らも、既に体制から見放されていた。

94年には資金難を押してチャイコフスキー・コンクールが催された。バイオリン部門の本選を週末の晩に聴くことができた。 予選から勝ち進んできたモスクワ音楽院に通う女子学生が、両親が苦心して誂えてくれたに違いない素朴なワンピースを着て演奏している姿をみて、この乱世に真面目に勉強する人、真面目な家族がロシアにいるのを見る思いをした。 彼女は、結局バイオリン部門最高位の栄誉を勝ち取った。 彼女こそは今有名なアナスタシアで、来る6月15日には私が主催する杉並区でのコンサートで名曲の数々を存分に弾いてくれることになっている。

もっと年配組みで親しい友人は、ミュンヘンに住み活躍するピアノの巨匠エリソ・ヴィルサラーゼ、アムステルダム・コンセルトゲバウの芸術監督、指揮者のマリス・ヤンソンス達である。
70年代にソ連から米国に亡命して以来消息を聞くことのなかった、ベラ・ダヴィドビッチに偶然、ロンドンで会ったのは今から8年前だった。 49年ショパン・コンクールで優勝した美しきベラをみるのは、なんと34年ぶりだった。 かの女の息子ディミートリーはロンドン交響楽団の芸術監督になったと云っていた。
日本から、混乱の続く崩壊後のロシアに留学し、指揮法を勉強したのが西本智実。 私のよき友人の一人だが、彼女はその頃の苦労話をする時も、明るく愉快に話する。そして、ロシア音楽についての造詣の深さに私は何時も脱帽する。

蛇足ですが、ロシア人は最近、烏賊も食べるようになったし、それにモスクワの街を見て御覧なさい、肥った人なんか見かけなくなりました。

（了）

高木音楽事務所　高　木　恒　久
http://takagion.ciao.jp/

ベルリンの壁崩壊

元東ベルリン所長　福　本　匡　純

ベルリンの壁が崩壊したのは、1989年11月9日でしたが、私の東ベルリン駐在はその前後の3年半、即ち1988年3月から1991年9月迄でありました。以前デュッセルドルフに駐在の時に何度か東ベルリンは訪問していたので、街の様子は大体分かっていましたが、いざ駐在してそこで仕事するとなると、国家体制が体制だっただけにかなり緊張しながら赴任した記憶があります。まず西ベルリンに飛び、そこから車でチェックポイントC（チャーリー）の厳重な検問所を経由して東ベルリンに入りました。

この検問の厳重さは尋常ではありませんでした。パスポートのチェックが終わると車に乗っている者は車外に出るよう命じられ、ボンネットおよびトランクを開けてチェック、後部座席のシートを持ち上げてチェック、更に車の下を鏡を使って検査、最後にガソリンタンクが改造されその中に人や物が入ってないかを金の棒で突っついて確認してようやく終了です。

事務所は「国際貿易センタービル」と云う日本の鹿島建設が建てた高層ビルに外国の会社が集められ、日本の商社は全てこのビルに事務所を持たされ、現地雇員は人材派遣公団からぱりぱりの共産党員が派遣されて、彼（彼女）らに監視されながら各公団との商内を行って居りました。日本商社の駐在員は各社二人までと決めて居たようで、各社の商内も東独側にコントロールされて居りました。

私生活では、他社の駐在員は子供の学校の問題等から殆んどが西ベルリンに住み、そこから毎朝車で東ベルリンの事務所に通う生活でした。我が社の場合、東ドイツと商売やるには、矢張り東ドイツに住むべきだと云う考え方で、全員東ベルリンに住んで居りました（他商社社では三井物産のみが東ベルリン在住）。従って、仕事が終わると毎日の様にチェックポイントを通って西ベルリンに出て食事をして、又東に戻って来ると云う生活を続けて居りました。

東独は共産圏の優等生の地位を守るべく西側からの情報は厳格に規制しており、テレビは西ベルリンや西欧諸国はPALシステムですが、東独はNTSCのため、テレビを持っていても西側のテレビ放送は見れません。唯一ラジオは西側の放送を聞けましたが、やはり秘密警察による取締りが厳しく西側の情報派殆ど入って来ない状態でした。こんな状況の中でもだんだん　民主化の波が強くなり、1989年秋にはハンガリーを経由して西ドイツに　脱出を計る市民が続出し、10月にはホーネッカー書記長が辞任するなど、国中が騒然として参りました。

日本と東独との関係では毎年交互に開催される一大イベントの日独経済会議がありました。当時の日本側代表は斉藤英四郎経団連会長、東独はBeil外国貿易大臣で、化学技術部会、商業部会、金融部会などが設置され、我が社の田中義巳社長も日本側の常任理事を務められておりました。この年の会議は当初9月東京開催の予定でしたが、東独の状況が不穏であったために延期され、11月16日に合同会議が開催される事となりました。

各商社の所長は部会等の開催もあるので、前の週の11月10日（金）までには東京に戻る必要がありました。しかし、会議が開催されるのかどうか心配な状況であり、皆帰国を一日延ばしにして状況を探っておりましたが、6日になって東独側の公団総裁やバイル大臣も東京に向かうとの情報があり、開催は間違いない状況となりました。そして、私は、後から思えば、壁の崩れる当日の9日の朝にチェックポイントチャーリーで厳重な検問を受けて西ベルリンに出てそこから東京に向かい10日に成田に到着致しました。

その日は金曜日で翌週からの打合せの為に成田から直接会社に向かった訳ですが、会社に到着すると、直ぐに「福本君！！ベルリンが大変な事になってるぞ！！」とファックスを見せられました。壁崩壊の状況が大きく報じられて居ましたが、実情を聞き出すべく現地は真夜中でしたが我が社の内田利昭駐在員宅にTELを入れました。しかし、当日デュッセルドルフで機械部門の会議があり、彼は出張中、他商社の所長連中も

会議に備えて日本に帰国しているため状況掴めず、新聞・テレビに頼る他ない状態でありました。
　月曜になって東独の連中にも聞いて見ましたが、彼等らにも詳しい情報は入らず、ただウロウロしている様な状況でした。それでも会議は予定通り行われ、東独から参加者も19日には全員帰国し、私も後かたづけをして、21日には東ベルリンに戻りました。戻った時のチェックポイントチャーリーは出た時とは大違いで、検問は無いに等しく何だか気が抜けた様な感じで厳重な「東独」の雰囲気は完全に無くなって居りました。

　後で壁崩壊時の状況を聞いて見ますと、ハンガリー経由で市民が脱出する事態が続く中、 9日に内閣のスポークスマンであったシャボウスキー氏がテレビで、今迄東独国民はパスポートも持てず、外国は勿論、西ベルリンにも行けなかったが、今後はこれを自由化して誰もが外国に行けるように法律改正を行うとの発表を行った。その際に「何時から実施されるのですか？」との質問に「即刻だ！」と答えてしまった為に、テレビを見ていた市民は、直ぐにでも西ベルリンに行けるものと勘違いして歓声を上げて、壁に駆け付け西側に出ようと押し掛けた訳です。その後の状況はご承知の通りですが、この騒ぎの中、あれほど厳重で過去に多数の東独国民を射殺してきた国境警備兵が、彼らも勘違いしていた為か、或いは群衆の数と勢いに押されたのか、誰も発砲せず死傷者が一人も出なかったのは奇跡と云う他ないと思います。

　東ドイツも今ではドイツ連邦共和国の一部として、発展しつつありますが、当時の東は確かに裕福ではなかったが、皆まじめに働き、品質はともかく食べ物が不足する事もないし、車もベンツは無いが、強化プラスチック製ボディーのトラバントなる小型車が走り、犯罪は皆無で安心して暮らせる街でした。私の社宅も社会主義にはインフレは無いとの理由で先輩が最初に借りた家賃が長年据え置きでした。それが、壁が崩れたとたんに値上げを要求され、あっという間に西ベルリン並みの家賃になってしまった苦い経験もあります。インフレや犯罪や失業の無い東ドイツの生活は良かったと考える旧東独国民も相当居るのではないでしょうか。

ポーランド、ユーゴそして飛んでイスタンブール

元ワルシャワ・ベオグラード・イスタンブール駐在　水　堀　　勤

　美人国なので、独身で行くと現地の女性とくっついてしまうよ、などと言われたせいもあって急いで見合い・結婚し、29年前の1978年9月にポーランド、ワルシャワに赴任した。

　80年に入って美人達にも見飽きた頃には物不足が始まった。レストランではメニューにあってもオーダー出来ないものが多く、国営マーケットの陳列棚はがらんとして買えるものは、じゃがいも、玉葱、壜詰食品程度。 皆がいつも買い物袋を持ち歩き、長い行列で何を売っているか分らなくても行列があれば並び、順番が来て、あぁ売っているのは輸入オレンジだ、バナナだなどと分る。物不足の中で何か珍しい物を買えた時は嬉しいものだった。北国のポーランドでは普段手に入らないオレンジが3つー4つも運良く買えれば、夕食は少しばかり楽しくなった。

　港町グダンスクから始まった連帯運動が激しく物不足もひどくなり、81年に配給制となった。我々もニチメン事務所で配給券をもらって、砂糖、小麦粉、酒・タバコ一人月に何キロ、何個とかの配給制。肉もなかなか買えず地方出張した時に、農家で子牛を締めてもらって持ち帰ったこともあった。妻がノコギリでそれを細かくしていた。

　しかし、こんな中でもオペラ座では若い女性がオペラを楽しんでいたりして、“さすがに文化の香り高い国だった。行列に子供連れがいれば先頭に行かせたり、市電に乳母車を載せる人あれば皆で手助けしたり、優

しい人が多かった。仲間で森に行って、何かあるものを食べ、ウヲッカ飲めば、“森へ行きましょう、娘さん・♪♪”などとポーランド民謡も出て皆な楽しく物不足も関係なし。物が豊富にあるかないかなど、人の幸せにあまり関係ないようだ。社会主義の良い点は確かにあった。資本主義に変わった今のポーランドはどうなっているのだろう。

81年に入ると連帯運動が更に激しくなり、ソ連軍が来るのではないかなどと不穏な空気が広がった。労働条件改善や週休二日制やら連帯の要求はエスカレートするばかりだったが、その一方では私が担当していた工場でも、機械の陰で労働者がウオッカを飲んだりしていて、大金払って西欧や日本から買った機械設備も生きていなかった。
車にガソリン入れるまで2、3時間の行列が1日、2日にもなり、経済は破綻していた。

行き着く先として1981年12月13日に戒厳令が発令された。家の窓から見ると雪の中に装甲車が並び、銃を構えた沢山の兵士がおり、テレビでは、いつもの女性アナウンサーに変わって軍人が何事かを放送していた。BBC短波放送などでマーシャルロー、戒厳令だと分った。 それから、TELEXや電話など国内、国外との全ての連絡が途絶え、沢山の日本人技術者が滞在する幾つものプラント建設現場をニチメンは抱えて、右往左往やら葛藤やらが起こる事となった。

私の家のすぐ裏手に住んでいた（と後でわかった）ヤルゼルスキ将軍が指導した戒厳令は、社会主義経済が行き詰まった混乱の中では適切なものだった。連帯幹部の逮捕や多少の混乱はあっても、処刑、虐殺された人達もおらず総じて平穏で、よく準備されていた。ソ連圏ではあるが、いかにもショパンの国らしい戒厳令だった。その冬は―20度以下の日も多く雪も多かった。

ユーゴスラビアの様子は違っていた。
1989年11月赴任当時、ユーゴは東欧共産圏で一番の先進国で、企業もコメコン諸国の国有と異なる“社会有”で、ある程度の競争原理も働き物も比較的豊かだった。貿易公団の人間も、ポーランドやブルガリア等と大いに違って、西側のビジネスマンに近い雰囲気だった。しかし、時代の流れもあって徐々にユーゴ人のタフさ・激しさを知らされた。

赴任後暫くして、ユーゴから見える、ルーマニアのテミショアラの町で暴動が起こり、あれあれという間にチャウシェスク大統領夫妻が処刑され、これはユーゴにも大きな影響となった。

インフレがひどかった。スーパーの値札が頻繁に書き換えられたり、僅か4名のニチメン現地所員の給料の札束を運ぶのにアタッシュケースが必要だった。 現地スタッフとの給与改定交渉がベオグラードの各商社所長の一番の頭痛の種だった。各商社で女性現地スタッフも机を叩いての賃上要求や、労働組合資料を突きつけられて攻撃されたり、これが毎月毎月の行事で、交渉中に所長が心臓発作で倒れ帰国した商社もあった。所長達は寄るとさわると鳩首会談をした。本来、商売仇だが、これほど仲の良い商社所長達も珍しく、その関係は今でも続いている。

ユーゴの6共和国を結び付けていた社会主義イデオロギーが弱まってくると、各共和国の結束が乱れ、それが混乱を呼んでベオグラードでも発砲事件、テロなど血生くさい出来事が頻発した。ポーランドでは一番の混乱期でもこのような記憶はないが、ユーゴではなんでも激しかった。両方とも同じ出のスラブ人で言葉も似たようなものなのに、国民性は大分違う。ポーランド人をお公家さんとすれば、ユーゴ人は野武士。同じ東欧スラブだが“森へ行きましょう、娘さん”とは別の世界。ユーゴ人は女性でも身長180センチ以上も多く、体格も話し声も大きい。こんな娘さんと森に行ったらどうだろうか。

ユーゴ人は強いから、戦争を始めたら世界を相手にでも戦うな、など思っていたら最後には本当にNATO

軍と戦争を始めてしまった。
　1991年夏にはユーゴ連邦軍と、独立を目指すクロアチアと衝突が始まった。戦車とはすごいものだ。100m以上離れた道を戦車が通ると地震の様に家が揺れた。ポーランドの戒厳令の時に街にあったのは装甲車で、稀に軽戦車があったが威嚇用のお飾りで、今度は本当に戦いにゆく堂々たる戦車だった。素朴で気性の激しいユーゴ人だから、若者の前線への志願兵も多く、それからはユーゴ各地で悲惨なこととなった。

　ベオグラードとクロアチアのザグレブなどとは人々が頻繁に行き交い、ユーゴ各共和国の人たちは、この間までは仲の良い隣人だった。話言葉も北と南で、東京弁と大阪弁ほどの違いもないような同じユーゴ・スラブ、南スラブ人なのに、なぜ戦いをするのかとユーゴ人と話しても、向こうが悪いのだ、自分達は正しい、の一点張り。スロベニア・クロアチアも、ボスニナ、セルビア・モンテネグも、マケドニアも皆同じ。

　この南スラブ人を取り巻く環境と歴史は非常に複雑、難しい。同じスラブ人で殺し合いが起こっても仕方ない、南スラブ人の抱える出口のないような難しさだ。

　南北に細長い南スラブ人の領域に、北部へはローマカソリックとローマ文字が入り、南部にはコンスタンチノーブル(イスタンブール)から正教とキリル文字。同じ言葉を喋る民族に、異なった宗教と文字。ドイツなど近隣国がこれを離反に利用したり、また後になって南からはイスラムのオスマントルコが進出、ユーゴを蹂躙して数百年の支配を続けた。同じ南スラブ人でも宗教の違いなどから結束力が弱かったようだ。長いトルコ支配の時代に、トルコ兵にする為に沢山の子供がトルコに拉致されたり、トルコから虐待を受けたり、大変な時代が非常に長かったが、その時セルビア人が祈るのはセルビア正教で、トルコの圧迫に耐えて守ったその宗教は自分達のアイデンテイテイそのもののようだ。スロベニア・クロアチアの人々に取っては、それがカソリック。社会主義イデオロギーが勝っていた時には忘れられていた宗教が、社会主義の崩壊とともにも良き隣人同士を悪魔にしたようだ。ユーゴ人と政治の話をすると最後は、問題の解決方法が無いことの議論となり虚しい。翻って日本は、どことも接していない島国で大変幸福だったと思わずにいられない。日本の川の向こうが朝鮮や中国だったり、あるいはロシア人だったりしたら鬱陶しくてかなわないし、同じ日本語喋るが、もし東日本と西日本が違う宗教と文字だったらどうだろう、会津人は西国への恨みを忘れなかったかも知れないし、関東人と関西人が大井川を挟んで馬鹿に仕合ってたかも知れない。今の日本と韓国のようなものか。その甘ったるい大阪弁はやめてくれとか、かっこつけた東京弁はしゃらくさいとか、理由はなんでもつく。

　セルビア、クロアチアの政治家が保身の為に、狭い民族主義を主張し始めたのを、ニチメン事務所のスタッフも、多くのユーゴ人も分っていたが、それを止める程の力にはならなかった。偏狭な民族主義を持ち出されると人間は弱い。

　ポーランドも一時、国がなくなる苦難もあったが、正教徒からカソリックに改宗したりはしたが、国民が同じ宗教・文字であったことは幸せだった。ポーランドにはユダヤ教徒も多く、アウシュビッツの惨劇はあったが、異教徒の出来事ゆえか、“本当の”ポーランド人にはあまり関係がないようだ。

　ユーゴ人は素朴で良い人ばかりだが、ユーゴ人と政治の話は難しい。ポーランド人が大好きな、皮肉と笑いを込めた政治小話をする雰囲気はない。
　民族内で宗教が違い、周辺国をトルコ、ルーマニア、ハンガリーなど異民族・異教徒に囲まれいつも緊張を強いられた結果が、非常に強いユーゴ人を作り上げたようだ。でも、
　宗教と文字の違いなどが、人が混じり合うのを邪魔してしまった。両親がセルビアとクロアチア出身の、我が家の家庭教師だった綺麗な女子大生は、両共和国が戦争を始めて可哀そうだった。若い人達が、自分の国で将来の希望を持って溌剌と生きにくい国だ。
　ユーゴの争いは内戦であって、どちら側にも理屈のある内輪もめだが、セルビアだけが第三者のNATOに

攻撃されたのは、異教徒であることも理由があるのだろう。異教徒に対する攻撃は、同じ宗派の者に対するのと違い抵抗が少ないようだ。祈る神が同じだと攻撃にどこか引く所があるのだろう。ユーゴの内戦はそんな感じだった。アメリカが日本には原爆を落としたが、ドイツにはしなかったのは、同じ理屈なのかも知れない。

ベオグラードの治安が悪くなり、次の任地のトルコ、イスタンブールに行く事になったが、知り合いのユーゴ人にトルコに転勤する、と告げるのは気が進まなかった。ユーゴから出てゆくのは良いが、よりによって、あのトルコに行くのか、と言われそうだったし、自分達はここにいるより、しょうがない、とも言われそうだった。

実際そう言われた。そして、イスタンブールは危険な町だぞ、気を付けろと治安の悪いベオグラードにいる人に、トルコ行きを同情された。当然ながらトルコの印象は非常に悪い。

1992年10月、身の回り品と家族を載せて千キロ先のイスタンブールに向けてベオグラードを車で出発した。ニチメンベオグラードに残った現地スタッフは、今後大丈夫だろうかと思ったり、他へ行けぬ者をおいて自分たちだけユーゴを去る、後味の悪い出立だった。
結局戦争は1995年まで続いた。

ここまで書いて、ポーランド、ユーゴと、いつも一緒だった妻の雅子にはとても感謝している。両方の国でいろいろあったが、愚痴を言わず、いつも笑顔でやってくれた。 次に行ったイスタンブールでも、これまでの東欧とは全く言葉の違う国で、事務所をオープンするまで自宅兼仮事務所で秘書役をしたり、アテンド手伝いなどしてくれた。

いつの間にかトルコ語も覚え、現地の知り合いを作り、今でも、日本に来るトルコの友人をお世話したりしている。時間ができたらトルコ、ブルガリア、旧ユーゴ、ハンガリー、ポーランドなど、走り廻った、なつかしい国々と友人を訪ねようと話している。

社会主義国から資本主義へ

元ワルシャワ駐在　中　條　幹　雄

1987年12月31日ロンドン経由、雪がシンシンと降るワルシャワ空港にたどり着き神原君（小生の前任者であり，且つ後任者―同君は現在日本精工のワルシャワ事務所顧問をしておりポーランド駐在は通算20数年になる）の出迎えを受け4年7ヶ月（1992年7月帰国）のポーランド駐在がスタートしました。
赴任前に在籍していた鉄鋼原料部時代ニチメンは西アフリカのモーリタニアのミフェルマ鉄鉱石の日本製鉄会社向け輸入窓口をしていた関係から、同鉱山の開所式に一度及び鉱山調査に一度パリに立ち寄った以外ヨーロッパまして社会主義の国に足を踏み入れるのは初めてであり、大変心細い思いをしたことを思い出します。

同時に1960年代鉄鋼原料本部石炭部がポーランドから年間100万トンの原料炭の対日本製鉄会社向けの長期契約を成約し、これを皮切りに、日本精工と組んでBall　Bearing　Plant（at　Kiece ーこのプラントを後刻日本精工が買収し、プラントの近代化のため神原君が同社に入社）,Taper　Bearing　Plant(at　Sosnowice),Ball　Bearing用鋼球工場（at　Poznan）クボタと組んだ鋳造プラント（at　Kutno）,小松製作所と組んだ鍛造プラント（at　Stalowa　Wola）の納入など他商社を圧倒的に凌駕する大事な市場であり、これ

らの実績を築き上げた諸先輩の苦労を汚すことなく更に積み上げなければと身の引き締まる思いをしたことも事実です。

ご承知のようにポーランドは1795年のロシア、プロシア、オーストリアの三ヶ国に完全分割されて以降120年間欧州の地図から消え去り、その後1939年には再度ドイツとソ連により分割され、第二次世界大戦ではソ連に従属する形での人民共和国が設立されるなど歴史的には大変悲惨な経験を有する国ですが、こと共産主義の崩壊という観点からすると有名なワレサが1980年8月に主導したグダンスクの造船所におけるストライキに端を発した「連帯」の発足でしょう。

この間、紆余曲折はあったものの小生の赴任した約1年後の1989年2月共産党政府、連帯、全国公認労組などから成る「円卓会議」が開催され政治改革、経済改革―市場経済原則の導入をはかり生活水準を向上させ、インフレ抑制を狙う―司法改革、表現の自由、議会選挙、大統領制など民主化に向けた合意文書が締結され、部分的自由選挙、東欧で最初の非共産主義主導内閣の発足となど大きなストライキも暴動もなく実行され、我々ワルシャワに住む者にとっては「静かな無血革命」だったと言ってもよいと思います。

このようなポーランドの動きは他の東欧諸国にまたたく間に広がり欧州を分断していた戦後の世界秩序を崩壊させ、その象徴であったベルリンの壁を崩し、東西両ドイツの統一を実現させ、激動の震源地であるソ連ではペデストロイカの進展がソ連共産党の一党独裁を終焉させ、ソ連の連邦制の崩壊にも繋がったものと思います。

上記のようなポーランドの「静かな無血革命」以前は町の店もさびれ、品物もなく暖房用に使われる石炭の排煙の影響で雪が灰色のため町自体が「どんより」とよどんでおり、街角には食肉、ウオッカなど生活必需品を買い求める行列が目立ちました。現地の人が買い物をする「バザール」にはキャベツ、ジャガイモ、ニンジン、タマネギぐらいしかなかった（女房に聞いたら卵も肉も花も売っていたそうですが）のではという記憶しか残っておりません。ところが、1989年4－5月以降、特にベルリンの壁の崩壊の1989年11月以降には町中に西側諸国から入ったグレープフルーツ、大きなリンゴ、タバコ、衣料品などなどが所狭しと並べられ町が一遍に華やかになり、心和む思いをしたことを思い出します。

又、1988/1989年には事務所で使うTLX、FAX用紙やカラーペンなど文房具は一切国内で調達できず、車で8－9時間かけ西ベルリンまでの買出しに行かざるを得ませんでした。西ベルリンに入るには東ドイツの国境を越えなければなりませんが、国境の検問では一台毎に虫眼鏡状の大きな鏡で車体の下をチェックするため（昔、車体の下にもぐり西側に逃げた人がいたため）車が長蛇の列で検問をパスするのに数時間も待たざるを得ぬ上に検査官からは日本のカレンダーをねだられ閉口しました。

西ベルリンは西側そのものの華やかな雰囲気につつまれており、西側の壁には梯子が取り付けられ東ベルリンを一望できましたが、梯子を登っても全くポーランドと同じどんよりと暗く、当時、東ベルリンにいた福本所長から東ベルリンの事務所に立ち寄らないかとのお誘いを受けましたが「全くポーランドと同じ景色故、行かなくて大体雰囲気は分かった」とお断りし、逆に福本所長に西ベルリンに来てもらい「さくら」という日本レストランで日本酒を飲んだものでした。

神原君とは今でも適宜メールのやりとりをしておりますが、小生が駐在時代には想像すらできなかったゴルフ場がワルシャワに1ヶ所、クラコウ始め国内にもすでに数ヶ所あるそうですし、西側諸国の大型ショッピングモールや大型回転寿司店などができているそうです。
又、彼が送ってくれたポーランド情報・外国投資庁の資料によれば、自動車関連産業の日本の進出企業はトヨタはじめ26－27社、自動車以外でもシャープなど9－10社（小生駐在期間中は日本企業は9商社のみ）となっており隔世の感がします。

最後に「お前は駐在期間中何の実績を残したのだ」という声が聞こえてきそうですが、それについては誌面の都合もあり次回ということで。

“カダフィーに狙われた男”ニチメンOB　浮貝泰匡君

吉　川　秀　夫

3年前、私と同期の浮貝泰匡君が、ニチメンのリビア駐在員時代の出来事を中心に激動の半生を綴った「カダフィに狙われた男」を上梓した。

最近、この本が産経新聞のコラム「産経抄」に引用されたので、あらためて、彼の波瀾に富んだ人生の一端を紹介してみたい。

浮貝泰匡君1961年、日綿実業に入社した。東京支社が、まだ室町の「近三ビル」にあった頃である。配属された機械部電気通信機課では、その頃、北アフリカのリビア向け短波通信局建設プロジェクトの国際入札に日本電気と組んで応札し、当時課長だった矢吹　敦氏が現地に飛びミラノ店の支援を得て落札に成功した。

日本電気から十数名の現地工事団がリビアへ派遣されることになり、ニチメンからも現地コーデイネーター要員を派遣することになって、入社3年ちょっとの浮貝君に白羽の矢が立った。「課員の中で精神的に一番タフな奴を選んだ」と言うのが上司の後日の弁。

1964年秋、ニチメンのリビア駐在員として首都トリポリに駐在赴任する。

当初の主たる業務は、前述通信局建設プロジェクトの現地コーデイネーター役であった。

プロジェクトオフィスの立ち上げに始まる現地工事拠点の設営業務から資機材の現地通関、砂漠の遠隔工事現場への輸送、現地業者の選定業務などすべてが初体験で試行錯誤の連続、たいへんなご苦労があったようで著書に詳しい。

現地工事が終盤に差し掛かった頃のある日、トリポリ海岸のカフェー・ボンボネーラで王制リビアの政商、アゼデイン・ラハデリ氏との運命の出会いとなる。

ラハデリ氏の慧眼鋭く、浮貝君の人となりを一瞬にして見抜く。

彼も出会い頭に強く惹かれるものを感じたと言う。

彼いわく、馬が合うとはこのことか、お互いつたない英語で語りあいながらも、当初から話が妙に弾み、噛み合う。 面白いように仕事が決まりだした。

商い実績を積み重ねるうちに、堅実な仕事振りも高く評価され、ラハデリ社長は彼に全幅の信頼を置くようになり、完全に自分の社員として思い込むようになって来た。

同社に彼専用のデスクが設けられ、そこで本来ならバイヤー側業務であるLCの申請書作成や現地輸入通関書類の作成業務まで任されることになる。

ラハデリ社はもともと建材屋で欧州からの各種建材の輸入が主であったが、その後、ニチメンは日本電気、日産、小松など大手メーカーの商権を次々と獲得していった。

各社との代理店契約締結のためラハデリ社長が訪日するなど、リビアとのビジネスが活況を呈し、関連業界でもラハデリ社は、一躍注目を浴びることとなった。

ある日、国王に日産の最高級車プレジデントを贈呈することになった。

ラハデリ社長の仕掛けで浮貝君が同社長に代わり、この贈呈式に臨むことになりトリポリより国王の専用機に乗って、アラブの美女軍団に案内され、砂漠奥地の別荘にお住まいの恍惚の国王に、拝謁の栄に浴すこともあった。

あっと言う間に、4年の駐在期限が来た。これをいち早く察知したラハデリ社長より「俺の片腕になってくれ、これまで一緒に築いてきた商売を手伝ってくれないか」と熱烈な誘いを受ける。

リビアを愛し，ラハデリ社長を第二の父親と敬愛するようになっていた彼は、予ねてよりの独立の夢が実現に向けて動き出す絶好のチャンス！と転職を決断する。

ニチメンに辞職届を出すが受理して貰える訳もなく揉めた。

売り手から買い手に鞍替えすることに相当の道義的責任を感じ、心の葛藤があったようだ。

一時帰国の上、ニチメンに事情をよく説明し、晴れてラハデリ社長の片腕となる。

リビアは当時イドリス国王の時代で、欧米のメジャーがあちこちで油田を堀り当て、世界の極貧国から一気に石油大国になった、まさに絶頂期であった。
ラハデリ社の商売も益々の発展が期待されていた。

好事魔多し、1969年9月1日　カダフィ大佐によるリビア革命が勃発し、リビア王政はあえなく崩壊した。
浮貝君が転職してから、わずか6ヵ月後のことである。
その時の緊迫した様子を彼の著書から引用してみよう。
「その夜、家に帰って、今起こっている事態について整理してみた。今日、取引先で得た情報によれば、間違いなく私の身にも危険が迫っている。その会社のオーナーは王政派のリビア人であるし、海外との取引も手広くやっている。そこで実際に実務をやっていたエジプト人が逮捕されたのである。 私とラハデリ氏と同じ関係である。
明日、ラハデリ氏に脱出を申し出ようとの結論に達した。
と、突然ドアが激しくノックされ、ラハデリ氏が血相を変えて現れた。
“お前の身も危なくなった、明日朝一番の飛行機の切符を用意したのでローマに脱出しろ！”
無事脱出できるのか、もし逮捕されたら、助けてくれる人は誰も居ない。
ニチメンに今更、助けを求めることなど出来はしない。
ニチメンとしても王政派の人間の救援工作をしたら、リビアでの今後の商売に影響するだろう。脱出まで後数時間しかない。
わが人生、この時ほど、孤独と恐怖を感じたことはない。」
浮貝君とラハデリ社長夫妻は着の身着のまで、間一髪トリポリを脱出する。

その後は、カダフィの放つ刺客に追われる身となり、カサブランカのホテルでは、刺客の待ち伏せに合い、危うく脱出し、マラケシュ、ローマ、ミラノ、カサブランカ、ベイルートと恐怖の逃避行が続く。
刺客の包囲網がどんどん狭まり、宿もホテルから小さなアルベルゴ（旅籠）に移り、追い詰められて、ラハデリ夫妻はついに日本に逃亡する。
ある日、「インターポールから、ラハデリ氏の所在について照会が来ているが今どこに居るのか？」と警視庁から日本橋の彼の実家に電話が入る。
ラハデリ夫妻は日本にまで刺客の影が迫っていることを知り、日本を出る。
その後、ラハデリ氏はモロッコの国籍を取得し、カサブランカに事務所を構えた。
浮貝君はラハデリ氏の紹介状を片手に中近東、アフリカ諸国を営業行脚の日が続いた。

1980年6月13日（金）の朝日新聞の最下段に小さな記事が載った。
「リビア人、アゼデイン・ラハデリ氏がミラノ駅構内の公衆電話付近で、何者かに襲撃され、銃弾5発を打ち込まれ死亡した。これまで2ヵ月半殺害されたリビア人はイタリー内で5人・・・・・」

その後の浮貝君は、全てを失い、自ら派遣社員となって海外プラントプロジェクトのコーデイネーター要員として働き、中近東、東南アジアに3年ほど滞在する。
帰国後、休眠会社を「日永インターナショナル株式会社」と社名変更して、捲土重来を期する。リビアでの経験と人脈を活かし、海外プロジェクトに特化した人材派遣ビジネスへの進出である。
現在は海中ケーブル敷設プロジェクトのコーデイネーション・サービスをメインに技術者の派遣業をやっており、100数十名の要員を擁するまでになっている。
5年ほど前に社長を譲り、今は会長職となっている。

“東京都千代田区神田燕の巣”
これは浮貝君が、俳句朝日の鷹羽狩行選で佳作入選した、ご自慢の作である。
江戸っ子の彼が、幼少のころは神田にも燕が飛んで来た。
この句について、飲み友達の誼みで私が、うっかり類句を見たと口を滑らした。
これは聞き捨てならぬと大騒ぎとなり、一年も経たが、ついにその類句の証を示せず。

銀座の小料理屋、卯波で手打ち式となりました。もちろん奢らされたのは、この私です。
最近彼は、この大騒ぎの顛末を得意の随筆で「疑惑」と題して軽妙洒脱に纏め上げました。
彼は仕事のかたわら、今も登山、スキーは現役、ワイン通でもあります。
畏友、浮貝君の益々のご活躍とラハデリ氏のご冥福を祈って結びとしたい。

タイ（泰国）のフランス人――或る国際交流

岩　下　恒　則

ガーシュインの「パリのアメリカ人」ならぬタイのフランス人の話。

東京に再びオリンピックを誘致する話しがあるがこれは昭和39年東京オリンピックが開催された時の話。会社の機械関係得意先のフランス人をアテンドしたことがあった。（昭和36年から40年まで仕事の関係でタイのバンコクに駐在）。

偶々機械担当社員の都合が悪く、経理担当の私が　接待することになったものだが、いつもの通り市内観光（寺院巡りや水上マーケット）、食事、ナイトクラブ案内など粗相のないように気を配った。彼の名はJ.D.リベー。食事をしながら話題は当然東京オリンピック（私はフランス語は駄目だが彼は有り難いことに英語が堪能であった）。

あの年はアメリカが圧倒的に強くメダル数も群を抜いていた。リベーさん「アメリカ人は体が馬鹿でかいから勝つのは当たり前（筆者註：どういう訳かヨーロッパではアメリカ人は評判が悪い）」と皮肉っぽい言い方で盛んに息巻いていたが、この辺りで彼と意気投合。

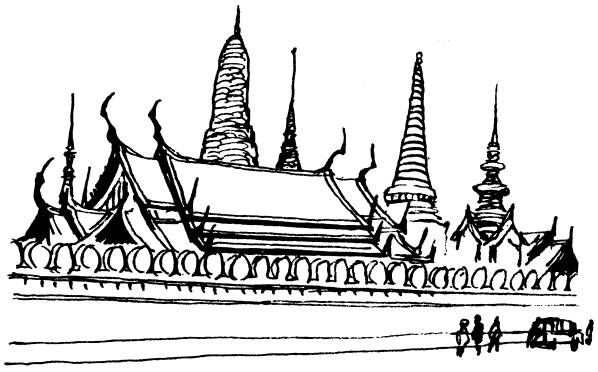
食事をしながら大いに語り合った。当時私は未だ独身だったが私のアテンドが気に入ったのか、僕が結婚するときには「シャネルの香水でも送りましょう」と言う。

翌40年に帰国。

その翌年結婚が決まった時、半信半疑で彼に手紙を書いたら、暫くして「シャネル」の大きな瓶がパリから届いた。之には大いに感動。それ以来文通が始まり、ご夫婦で一回、同僚と一回来日された時には我が家に呼んで食事をしたり、踊りを見せたり（幸い家内には日本舞踊の経験があった）家族ぐるみで喜んで貰った。娘が誕生したときは可愛いドレスが届いたこともある。

お二人とも既に亡くなられたがタイでの極めて懐かしい想い出だ。我が家にはこのフランス人だけでなくメキシコにいたとき付き合っていた弁護士一家、タイの会計士一家、インド人など機会があれば遠来の客を積極的に受け入れるようにしていた。

日本人の家庭を見せてあげるのも国際親善では大事なこと、異国の色んな人との家族ぐるみの付き合いは、それなりに楽しく又教えられるものも多かった。



＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

上記は06年12月17日掲載のものです。
（ブログアドレス）http://tomtom.cocolog-nifty.com/thomas

以　上

私のミレニアムと世紀はじめ

山　邑　陽　一

1999年4月号の月刊ニチメンに、私は「収穫の秋」という一文を寄せ、第二の人生に大学教授を選び、その準備中であると書いた。

その10月に退職した私は、関西に帰って吉報を待ち、2000年3月満63歳を迎えた直後の4月から、大分の日本文理大学に商経学部教授として就任し、「ミレニアム転職」をした。

桜咲く春から始めた大分での学園生活は、まるで夢のようだった。

丘の上の大学から歩いて25分ほどの丘の下の住宅地に、2 DKのマンションを借りて単身生活を始めた。

大分市内では東端に近い大在駅前から徒歩10分の、舞子浜天然温泉にすぐ近い10階建ての住宅ビルの3階西南隅に住んだ。

近くに桜並木の美しい川が流れ、広い公園があり、雲雀が天まで舞い昇る麦畑が広がっていた。

魚の旨い料理屋もあった。

大学までは駅から大学バスがあったが、野原と住宅地の中を歩いて通勤するのもまた、楽しかった。

森の中から鶯の声が聞こえ、広い大学の構内に入ると、講義の間じゅう鶯の谷渡りが聞こえた。

本館と研究棟をつなぐ渡り廊下の横側のすぐ下にある広い研究室を与えられたが、南向きで日当たりがよく、渡り廊下を本館側に渡りきった所にある桜の大木の満開を真向かいから眺めながら、講義の準備をした。

研究机の前の壁に、久澤克己さんから頂いた教授就任のお祝いのファックスを貼って眺めた。

学生たちに授業するときは、自分が学生に還った気分になって、わくわくした。

最初の1年間は、三重大学の非常勤講師を兼任する条件だった。

講義を木曜日で終わり、木曜日は隔週で晩に別府港からフェリーに乗り、翌朝大阪港に着き、ニチメン中之島本社などに立ち寄ってから、近鉄特急で津に向かい、午後に2コマ連続で講義をして、関西に帰った。日曜日の晩にまた大阪港からフェリーに乗り、ライトアップした明石海峡大橋を眺め、月曜日の朝、別府港から帰宅後すぐ出勤した。

週末の帰省時に、別府から船に乗れるのが楽しかった。

帰省しない週末には、佐賀関に近い海岸の歩道を、海を眺めながらよく歩いた。

2001年10月には大学から韓国の提携校に出張して、歓迎を受けた。

02年には青島と上海へ、04年にはベトナムへ研究出張した。

05・06年にはベトナム協会の委嘱で、久澤克己さんと同国へ研究出張した。

06年には3月に大学退職後も、8月に久澤さんと再度同国へ出かけた。

05年にはモンゴルの留学生の案内でモンゴルを訪れ、そこで偶然、鯨岡繁さんと会った。

また、大分市長の要請で大分の姉妹都市武漢を訪れた。

在職中は、小田有久さんとシアトルへ出かけて大学野球用の投球機械を見学したり、村井靖武さんと台湾へ行ったり、岩田昭二さん・立古健策さん・林喜久雄さん・山岸正雄さんと九州旅行をしたりして、多くの社友の方々に啓発して頂いたことを、感謝したい。

（2007年3月26日、満70歳の誕生日に）

『インドシナ今昔譚』

Part－1－「仏領インドシナに生きる」

久　澤　克　己

『少年老い易く・・・』と、中学の漢文で習ったが、
爾来幾星霜（と書くと、大袈裟乍ら）を、
とにかく夢中で走り続けて、覚えず、
『喜寿』に王手の齢になっている！

昭和が終焉し、平成が明けた89年、時の定年58歳で退社した後、虎ノ門は中小企業事業団（現中小企業基盤整備機構）で海外投資アドバイザー（ベトナム他インドシナ地域担当）を6年間務め、96年に、社団法人ベトナム協会に転入、ドイモイ（刷新）という市場経済化路線に乗って年々変貌・成長を始めていた彼地への調査行脚を繰り返すようになってからでも11年、都合17年か経っているが、社会人生第二幕でも、有難い事に、ずっと先ずは元気に、一見若々しく、愉快に動き回れた。

これは後述のような、ちょっとした秘密もあるが、大本は日綿からNichimen/ニチメンと続いた「花の商社マン」の一員だった時期に、社内外/国内外で恵まれた無数の機縁・出会いを通じて培い（と言うより）、培われた諸々の友誼や絆、人脈、地縁・土地勘などといった現役時代の遺産というか繰越資産の賜物である。

Nichimen時代の小生は、外地駐在/出張の期間がやや長く、それらの合間の東京勤務の繰り返しだったが、内地原隊は一貫して機械部門。海外では、カンボジアを中心に旧仏領インドシナはメコン流域三国と、北アフリカのマグレブ三国のアルジェリアに一次、二次の石油ショックを挟んでの2回と都合3回で、のべ12年の駐在。

あとは再三の主としてアフリカ長期出張だったが、どこへ行っても当時、公用語や商用語はフランス語で、それも本国以上に仏語しか通じない国が多かった（これは、小生にはフッゴゥでなく、学校で、いま一だったフランス語会話も板につき、世界三大美味かのフツ飯もしっかり舌になじませられbien!　bien!だったが）。

（一）　カンボジアで、日綿の最大の商権はヤンマーのディーゼル・エンジンだったが、舶用を中心に人気が高くて、華商代理店を通して売れに売れ市場占有率70％ぐらい。

タイと南ベトナムでも同じ様なことだったらしく、三国の面するシャム湾から南シナ海にかけての沿岸一帯の漁船は殆ど、この「野馬」エンジンで走り回って居た。

愉快だったのは、69年だったか、時の日本サッカー実業団の雄ヤンマー・チームをプノンペンに迎え、完成真新しいナショナル・スタジアムでカンボジア・ナショナル・チームとの親善試合（アンコールワット見物を含め、1週間ぐらいの間に3回戦）を挙行した時だ。

当時のヤンマーは70年代前半に日本リーグを連覇する前だったが、68年のメキシコ・オリンピックで日本を銅メダルに導いた釜本邦茂（後のガンバ大阪監督）や吉村大志郎名選手らを、若き鬼武健二監督（現Jリーグチェアマン）が率いる名実共の強豪チーム。対するカンボジアン・チームも若くて強くて巧い選手が揃っており、「日本のヤンマーにサッカーを教えてやる」と意気軒昂だった。

結果は、両サイドそれぞれの予期に反し、1勝1敗そして1ドローに終わった。

3戦とも、3万人かを越えたスタジアムのロイヤルボックス席から、「ヤンマー行け、行けっ！」と声を涸らして応援してくれていた力石大使から「ヤンマー・ニチメンは名うての商売人だからなぁー」と妙な慰められ方をしたが、実は、負けた第2回戦の前々日に、ヤンマー選手団は全員、当国青年・スポーツ省の御招待でアンコール見物に出かけた。緒戦に快勝し、プノンペンから陸路4時間をバスで出発の朝は、時の日本人会長夫人・我がカミさん始め、全商社駐在員夫人方総出で握り飯を差し入れ「2戦目も必ず勝って下さいね！」と励ましていたが、この2戦目が思わぬ敗戦、最後の3戦目がドローに終わった。

考えるに、当時のエキップ・ナショナル・カンボジアンは日本側が考えていたよりかなり強かった。　も

う一つは、２回戦の前、あのアンコールワット本殿中央塔の急峻な階段（高さ13メートルある）を登り降りして来たら、いかなサッカー選手の健脚も二、三日は硬くなる。 あのカンボジア側の招待は作戦だったのでは！？・・などと考え出すと、40年近く前の事乍ら夜眠れなくなる。

日綿プノンペン店としては、戦後初代の故金口所長の時からの油脂原料の棉実やカポック・シード（ニチメン・サラダ・オイルの原料）や、メコン上流から伐り流されて来る高級木材ほか現地産品の買付け/積み出しも結構あったから、売買合せた店の商い高は断然、他社を圧倒、両国間貿易額の８％強を占めた年もあった。

（二）プノンペン店の特別任務として、国連ECAFE（事務局バンコク）の主導で57年から始まった、（初期の）メコン河開発調査の現地支援協力業務もあった。

これは流域４カ国（CLV三国とタイの４カ国）で結成されたメコン委員会本部が４カ国の真ん中で、首都がメコン本流に面しているCambodiaに設置されたからだが、当店は店を挙げ工営始め日本のコンサルタント各社調査団への便宜供与と関係役所に米、印、中（台湾）ら参加各国チームの大使館などとのLiaison役も進んで引き受けていた。

メコン開発は当時から現在もインドシナ地域開発の目玉だが、この業務は２代目故篠塚所長から引継ぎ、当時、調査時点から話題に上っていた大型開発案件は総べて前世紀中に実現！を夢み信じて、それこそ夜討ち朝駆けで全力投球、故篠塚先輩も本社帰任後、今度は公用パスポートで日本調査団の一員として来援してくれるなど力を合わせて頑張ったのだが・・・70年、こちらはロンノルという馬鹿将軍がCIAにそそのかされてかクーデタを起こし、非同盟中立の守護神シハヌーク国王を追放した途端、ベトナムの戦火が流域全体にはじけ、カンボジアでもラオスでも開発どころか、調査も何も中断已む無きに至り、我らが夢ついえ、以後91年のカンボジア和平協定締結まで、ほぼ20年間封印されることになった。

（この失われた、同じ20年の殆どの期間を、小生は頭述の通り、遠く西のかた、アルジェに２回駐在して小松（現コマツ）他建設機械類の売込みとアフターサービス・販促協力に没頭続け、更に、より遠いアフリカ西部戦線へのプラント機器売込みのプロ・ファイ出張を繰り返して、戦火が一向に息まず長引きに、長引いたCLV三国の悲劇には、ひそかに胸を痛めるばかりだった。）

メコン開発調査は、上記の如く一旦中断されたが、57年から前後約15年間繰り返された初期の本流と各支流及び流域一帯の各種調査結果、検討、計画、提案されていた幾つもの開発案件の資料は戦火をくぐり抜けて、関係各国や現「メコン河委員会」に引継がれており、世銀、ADBその他の国際機関や我が国や欧米各国からの新たな支援ODAで実現が図られている。

我が国が昨年、巨大なメコン第２架橋完成で「東西」1450キロの「経済回廊」を貫通させ、ベトナムのダナンとミャンマーのモールメイン港（南シナ海とアンダマン海）を結ぶと、中国は「南北」と来て、今、昆明からメコン沿いにラオスを抜けバンコク（シャム湾）に出る高速道路の整備に拍車をかけている。

70年初夏、６年半ぶりに帰国して家族と初めて新幹線に乗り、高度成長も「絶頂期の花」大阪万博を見て廻った時は、小生も、いささか浦島小太郎のような気分がした。しかし落ち込んでいる暇はなく、同年秋、本格開始された小松建機を擁してのパリ日綿と電機車両部の共同アフリカ上陸作戦に参陣すべく、南回りのAir-Franceで遥か眼下に曇るメコンの流れを一瞥して、一路西に飛ぶ。先ず向かったのは、故安藤さんの居るグロス・ゲロウのNKV大本営。

（実は、この後の70-80年代の事も続けて書きたかったが、この所、先に書いて置きたい事が次々出来たので今回は割愛し、以下、話を我が社会人生二幕目のクライマックス？今2007年に飛ばす）

Part－１－「仏領インドシナに生きる」　終

次号　Part－２－「懐かしき越南・第二の故郷」　に続く

「宮本和夫さんを偲ぶ」

福　富　直　明

4月17日に宮本さんが亡くなられた。令夫人へお悔やみの手紙を書きながら、私の人生の重大な節目には、何故か、いつも宮本さんが居られるのに気が付いた。

57年前の昭和25年、大学に入った年の晩秋、商社に勤務する先輩がパキスタンに赴任しますと、ウルドウ語の教授のところに挨拶に来られ、教室で学生たち十数人がその方と教授との対談を聞く形となった。それが宮本さんで、旅立ち前の気迫と自信に満ちている先輩という印象を受けた。

その後、私も日綿に就職、パキスタンとは全く商取引のない部署に配属され、学校で習ったウルドウ語からは遠のいた職場だったが、1958年に、パキスタンに駐在せよとの話が出て、飛びついた。 ちょうどその頃宮本さんが一時帰国しておられ、初めて正式にお目にかかった。前後の実情から見ると、私の移動の話を人事部につないだのは宮本さんだった様である。海外に駐在するのは、大きな節目だった。

カラチに赴任して、改めて実感したのは、日本で聞いていたように宮本さんが既に伝説的な存在であることだった。繊維機械を始め、セメントや国鉄向けのレールの入札など華々しい活躍をしておられ、「パキスタンには宮本あり」と言うのが、当時のニチメンの自慢で、パキスタン向けの商談にメーカーを引っ張り込もうと口説く時にこの言葉が使われた。

時代背景に考えてみると、パキスタンは1947年に英領から分離独立している。

宮本さんが現地に乗り込んだのは、建国後わずか3年目、漸く官僚組織が機能し始め、発展期に入ろうとする活気にあふれた時期だった。

そのころはOGL（open　general　licence）と呼ばれる何を輸入しても良い外貨割当制度があり、朝、目を覚まし、今日は、ミシンでも売り込むことにするかと思うと、夕方には何件かの注文が取れていたよと、宮本さんが言っておられた。

商談で、流暢なウルドウ語が武器になったのはいうまでもないが、パンジャブ語やベンガル語まで相手が何を言っているのか見当が付くと言っておられたから、語学に関しては天才的だった。しかも、語学力だけでなく相手を理解し、相手の心を掴む事でも天才的だった。

政府の買い付け機関の一つに、外国人が嫌いなのか、横柄で取り付きにくい官吏がいた。何か訊きに行っても禄に答えず、早く帰れと言わんばかりの態度を見せる男だったが、その彼が、宮本さんと初めて会って、20分程話すうちに、宮本さんに対して、Yes,sir.と丁寧な口調になり,心酔していく。私も同席していて、まるで魔術を見ているような思いがした。言葉では説明しようのない、カリスマ性というのか、人を魅了する力を持っている方だった。

こんなエピソードもある。東パキスタンで大口の入札があり、現地で入札書類を提出する直前になって、欧州の業者の方が日綿の応札価格を下回っているとの情報を入手、しかし、テレックスもなく、国際電話もつながりにくい時代だったから内地に値下げを要請し、確答を待つ時間的余裕もない。このままでは落札できないと思い、独断で値引きして応札し、その結果、受注に成功した。

海外駐在員が独断で値引きし、もしも内地が応じなかったら、最悪の事態になる。数年前にこの事件を思い出して、話題にしたら、宮本さんは、あの晩はやはり眠れなかったが、翌日値引きOKの返事が来て、ほっとしたよと述壊。

この離れ業をやってのけた時、宮本さんはまだ20歳代だったはずで、良くぞ決断なさったものだと思う。

1970年に帰任されるまで、何度か一時帰国されて、短いブランクはあったものの、ほとんど20年間の駐在だった。 20年のうちに、建国当時の課長は局長に昇進し、一工場主だった人が工業大臣になるといった変化があり、これにつれて、宮本さんの人脈の輪は拡がり、私も到る所で宮本さんの知人に出会った。

選りによって、一時帰国中でカラチに居られぬ時に極秘裏に処理せねばならぬ厄介な問題がおきた事がある。平文で打電するわけにも行かず、迂回路を使って手紙を送り、暗号を決めてからテレックスのやり取りに切り換えて、対策を打ち合わせているうちに、A氏がコネを持っているはずだから彼に仲介役を頼めとアドヴァイスを戴いた。それで無事に解決に持ち込めたが、そのときも、誰なら相手と話をつけられると言う人間関係の把握の正確さには驚嘆した。(あとで知ったが、この件の暗号交じりのテレックスが当時の福井社長の目にとまり、一体、カラチでなにが揉めているのかとご下問があったという)。

宮本さんのお名前も、人脈の拡大に一役買っていた。『宮』はウルドウ語のmiyan（＝masterとかlordの意)と似ており、『本』はmota-(=bigとかrich)と似ていて、覚えやすい名前だった。取引先の中には、それが本名だと思いこんで、Dear　Miyan　Motaと
いう書き出しの手紙をよこした人も居る。

パキスタンから帰任されてからは、プラント部の総師として中東やポーランドなどで活躍され、『パキスタンの宮本』は、どこの国でもやはりスーパービジネスマンであった。

私はヒューストンの駐在になり、日本に帰任することになったときプラント部に来ないかと宮本さんから国際電話がかかってきた。これもまた、人生の節目であり、あの電話がなかったら私の人生は随分違ったものになっていただろう。
49年間サラリーマン生活をし、その半世紀の間に色々な上司に出会い、なかには、上司と言うよりは敵でしかなかった御仁も居るが、人の話をよく聞いてくださった、すばらしい包容力と指導力をもっていた上司が宮本さんだった。
最高の師を失ったことは悲しい。安らかに眠られるよう、お祈りします。

合　掌

木元巌さんを悼む

高　木　恒　久

木元さんとは入社以来のお付合いで、その間種々ご指導いただいた。

奥さんのガーリャさん、お子さんの正人君と我が家へ幾度か遊びに来られたが、10年前ガーリャさんに先立たれてからの木元さんは、やはり寂しさを隠せずの生活だった。

最後に会ってからもう一年になる。吉祥寺で食事しながら、お遍路88ヶ所を完歩した話をしてくれたが、健脚で忍耐強い木元さんが途中で何度も投げ出したくなったという。

その後、電話で「ちょっと体調を狂わせているが、大したことはない。じきに良くなるから、、、」それがまさか、不治の病に冒されていたとは。

今思うと悔やまれる。死に顔は安らかであったが、一人残した息子さんを思うと、死に切れなかったのではないか。

会社への貢献は皆の知るところだが、誠に大きなものだった。合樹、石油部門への貢献は特に大きい。

商売を進める判断と手順に間違いのない人だった。決して驕らず、だから人から信頼された。葬儀に参列された人、参列できなかった人、皆同じ思いだと思う。

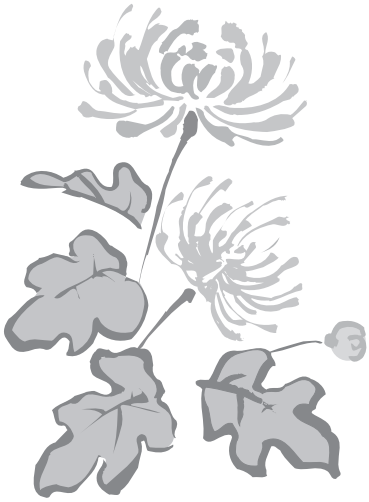
今、京都におられ我々2人にとっての入社時からの先輩、高木靖雄さんも木元さんの逝去にいたく落胆しておられた。

昔、ニチメンにいて、その後も木元さんを親身に助けた松村篤雄さんは、今ボストンに住むが、私が電話すると、未だ何も話さぬうちに木元さんに何かあったのではと感じたと言う。

モスクワでのアシスタント兼秘書だったインナさんにも報せると、深い哀悼の言葉が返ってきた。

木元さんのご冥福を祈る。

（2007年5月5日）



役員・世話人

会　　長	河西郁夫		
副会長	岩田昭二	石原啓資	
監　　事	丸山修作	廣田雄太郎	
世話人代表	倉又則夫		
世話人 （アイウエオ順）	石川博保 栗田久彌 橋本春彦 浜口信恭	大山弘雄 高木亨一 長谷川　洋	倉持次雄 西村照男 花澤和郎

（前列左より）：長谷川、広田、岩田、河西、丸山、倉又、橋本
（後列左より）：倉持、高木、花沢、西村、石川、栗田、浜口、大山

双日株式会社側での社友会担当部署及び担当者

双日シェアードサービス（株）

担当部署	人事・総務サービス部
担当者	青木聡弥　部長
電　話	03－5520－4088
ＦＡＸ	03－5520－2390
E-mailaddress	現在非表示

訃　　報

お悔やみ申上げます。

生前の面影を偲び、衷心よりご冥福をお祈り致します。

No.	氏　名	出身部門	死亡年月	享　年
1	木元　巌　さん＊	業　務	2007年４月	72歳
2	宮本　和夫　さん＊	機　械	2007年４月	79歳
3	山口　龍雄　さん	機　械	2007年４月	72歳
4	佐藤　茂　さん	繊　維	2007年４月	63歳
5	山川　秀夫　さん	食　料	2007年４月	85歳
6	定方　東彦　さん	化工・総務	2007年３月	67歳
7	江崎　陽三　さん	非　鉄	2007年３月	86歳
8	堀江　善一　さん	機　械	2007年２月	77歳
9	冨成　元彦　さん＊	繊　維	2007年２月	83歳
10	野田　邦彦　さん＊	石　炭	2007年２月	81歳
11	太田　陽之助　さん＊	財務・総務	2007年１月	77歳
12	松浦　昌幸　さん＊	食料・総務	2006年11月	86歳
13	千田　忠美　さん	業　務	2006年11月	72歳
14	細見　信夫　さん	人事・総務	2006年10月	79歳
15	河口　輝夫　さん＊	鉄　鋼	2006年９月	70歳
16	河田　郁夫　さん＊	業　務	2006年９月	80歳
17	仲谷　勝　さん	財　務	2006年７月	60歳
18	辻　賢三　さん	繊　維	2006年７月	76歳
19	江花　輝　さん	食料・繊維	2006年６月	67歳
20	満嶌　啓二　さん	副社長	2006年３月	89歳

（＊印は当会会員）　　更新年月：2007年５月

ニチメン大阪社友会

平成16年（2004年）6月30日以降にご逝去された方々のご芳名
（平成19年5月10日現在判明分のみ）

（敬称略）

1	篠原　均	H16/7	11	井上　熙敏	H17/3	21	住ノ江　英三郎	H17/12
2	川口　彰	H16/8	12	成願　啓一	H17/4	22	松田　宗昿	H17/12
3	森田　直正	H16/9	13	竹内　明夫	H17/5	23	高木　貞三	H17/12
4	原　芳朗	H16	14	谷合　茂実	H17/5	24	青木　清	H17/12
5	宇野　卯之助	H17/1	15	中島　崇良	H17/6	25	越納　馥子	H17/12
6	谷口　輝久	H17/1	16	宮部　芳夫	H17/6	26	山下　善三郎	H17
7	中川　義之	H17/2	17	大澤　捨一	H17/7	27	山本　英也	H17
8	小原　海司	H17/2	18	橋本　一義	H17/7	28	山口　兵一	H18/1
9	杉山　清	H17/2	19	古石　久三	H17/10	29	栄村　省二郎	H18/2
10	磯貝　純一	H17/3	20	大野　密	H17/12	30	前野　秀夫	H18/2

31	霜村榮一	H18/2	41	池内泰三	H18/10	51	川崎　栄
32	大橋金次郎	H18/3	42	山田　勲	H18/11	52	小林クニ
33	伊熊昌平	H18/3	43	片山　裕	H19/1	53	元木節子
34	米山　隆	H18/3	44	岡本英一	H19/1	54	谷田久恵
35	山本鶴喜	H18/4	45	江崎陽三	H19/3	55	竹村淑人
36	原田喜代治	H18/4	46	斉藤克人	H19/3	56	園部知宏
37	森　寛二	H18/5	47	杉岡　稔	H19/3	57	藤田和子
38	中島洋子	H18/5	48	野村隆章	H19/4	58	石崎菊子
39	杉本哲雄	H18/6	49	志方高明	H19/5	59	朝田昭一
40	西田　宏	H18/7	50	板村三枝子		60	溝口　拡

【編集後記】

会報第一号は、2006年の年内発行を目指して、巧遅より拙速を尊び、太閤一夜城を築くが如くであった。今また茲に第二号発行を可能ならしめたものは、’06年の総会にご参加の創立時のメンバーと、その後、会員になられた方々600名余であります。

素人グループによる編纂の結果は、ご覧の通りで、またまた悔いは残したものの、OB会のコミュニケーションの一助となれば幸いです。

今回は、OB会誌としては、当然の事乍ら、ニチメン時代のメモワールが多く寄せられた。
日本経済の発展の一翼を担いつつ、己の人生の大半をニチメンと共に過ごしたOB諸兄の迫真の物語である、あの人、この人の往事が偲ばれ懐かしい限りです。
人生の“林住期”から“遊行期”を生きていく為の縁となる事を祈りつつ、　(長谷川)

本号に寄せられたOBの寄稿文の多くが、図らずもソ連・ロシア・東欧特集号の観を呈したのは、筆者の本文に記した如く、偶然の所産と言うべきか、或いは、必然の連鎖作用とも云える。

往事茫々ではなく、昨日の事のように想起されるのは、如何に、その時代に心身ともに充実していたかと言えます。

次号にも、貴重な、メモワール、エッセイなどが載せられるよう皆様の寄稿をお待ちしております。

尚、「会員名簿」は原則として、年一回発行ですが ’06年総会後、数多くの新規加入者がありましたので、’07年度完結編を茲に同封いたしました。　(高木亨一)

ニチメン東京社友会

〒107－8655　東京都港区赤坂2－14－7
双日㈱内　東館17F

発　行　人　；倉又　則夫　代表世話人
編集責任者　；長谷川　洋　世話人
アドバイザリー・スタッフ；高木　亨一　世話人
倉持　次雄　世話人
印　刷　所　；㈲　関　内　印　刷